

冰心と『大海』

——冰心試論——

萩野脩一

一 冰心の評価

1 はじめに——一九二〇年代

(1) 一九二〇年代

(2) 『繁星』

2 一九五〇年代の中国

3 一九三〇年代後半の日本

4 一九八〇年代の中国

二 初期作品について

1 ジャーナリスティックなセンス

(1) 「兩個家庭」

(2) 「破壊と建設時代」的女学生」

(3) 新聞小説

2 傍観者

(1) 「斯人独憔悴」

三 冰心の文学性

1 平凡な人生

(1) 「寄小讀者」通信二

(2) 「南婦」

(3) 「相片」

2 おわりに——『大海』

注

作品表

一 冰心の評価

1 はじめに——一九二〇年代

(1) 一九二〇年代

謝冰心(以下、本文では冰心と略称する)は、一九二〇年代に大変人気のあった作家である。たとえば阿英(錢杏邨)は、次のように言っている。⁽¹⁾

謝冰心という名前は、中国新文学運動初期の歴史と大変密切に結びついている。彼女は優秀な創作家として存在したし、また卓越した小品文の作者としても存在した。彼女の「除夕」⁽²⁾、「十字架」⁽³⁾(『北京晨報附刊』)、「笑」⁽⁴⁾(『超人』所収)、「夢」⁽⁵⁾、「到青龍橋去」⁽⁶⁾(『往事』)所収)など、とりわけ「往事」(二篇とも)⁽⁷⁾、「山中雜記」⁽⁸⁾(『寄小讀者』所収)、および「寄小讀者」という本全部は、青年讀者の中に、かつて極めて大きな魔力をもったのである。今でも多くの青年の作品の中に、「冰心体」ともいふべき文体を見ることができ、当時においては、今さら言うまでもなく多かつた。青年讀者には、魯迅の影響を受けなかつた者もおろ。しかし、冰心の文章の影響を受けなかつた者はほとんどいない。たとえ、創作の偉大さと成功という面で魯迅が遙かに冰心を越えていたとしても、である。

この引用でわかるように、冰心は二〇年代には、魯迅をもしのぐ人気があつたのである。

また、『小説月報』一二卷、一三卷すなわち一九二二年、二三年には、冰心の作品とともにその評論も載っており、一三卷八、九、一一号には「創作批評」欄に合計八篇の評論が載るほどであつた。⁽⁹⁾ そのうち『小説月報』一二卷一十一号(二二年十一月一日)に発表された、潘垂統「對於超人命命鳥低能兒的批評」⁽¹⁰⁾は、改組した『小説月報』が初めておこなつた原稿募集作品の評論

部門の当選作である。⁽¹⁶⁾ 潘垂統は、次のようなことを言っている。

私の最後の評語は次のようなものである。私は著者の意図に大いに感謝する。著者の苦心はすべて、一般の意気消沈している青年を救おうとするところにある。青年の熱烈な希望は、社会の汚濁した勢力に打ち砕かれてしまい、種々の悲観的な考え方が生じている。世界は空虚で、人生は夢まぼろしだ。こうして、進むべき正道を踏み違えてしまう。意志の強い者は、自殺して苦痛から脱しようとし、意志の弱い者は、毎日憂愁のトリデにとらわれてくさくさした生活を送っている。近頃は、このような症状の青年が一層流行しているようだ。(略) 青年よ、この世の子供と子供はみな良い友達です。私たちは永遠に結ばれていて、見棄てられるものではありません。⁽¹⁷⁾ という叫び声が聞こえないか。「超人」⁽¹⁸⁾ は、我々青年を救う上帝なのだ。

このように、冰心の作品は、ここでは「超人」であるが、潘垂統を含めた青年たちの、当面する問題に解決を与え、彼らを元気づける役割を果たしていたのである。この潘垂統の評論を読んで、冰心らの作品が読みたくなったという読者もいたのである。⁽¹⁹⁾ また、直民(沈沢民)は次のように言う。⁽²⁰⁾

一輪の蓮の花のように潔白で、塵ひとつ染らずにまっすぐ伸びてきた詩人、それが冰心女士である。(略) 私は冰心の最近の「遺書」⁽²¹⁾ を読んで、ものを言わずにはいられなくなった。それが隔靴搔癢の憾を免れず、核心をつくことばでなく、いたずらに読者を誤らせ、作者に申しわけがたたなかつとも、言わざるをえなくなつて言うのであるから、読者も著者も許してくれるのではないかと思う。それで私は敢えて批評と言わず、ただ感想と言うのである。(略)

今、一部の人は「血と涙」⁽²²⁾ の文学を要求しており、一部の人は「感情奔放」な「幻想的」な文学を要求している。ところが冰心は、血に非ず涙に非ず、また幻想にも非ずといった、一潭の秋水のように安定して沈静した文学を作り出している。両方の人がみたら、どう思うであろうか。

しかし私は、「血と涙」の文学を要求もし、「感情奔放」な文学も好きであるが、同じように冰心の小説や詩歌にも心奪われ

る。「血と涙」の作品を読めば興奮もするし、「感情奔放」な文学を読めば陶醉もする。静謐で深奥な冰心の作品ならば、煮えたぎる私の靈魂に、一陣の清風のような慰めを与える。

のちに、ソビエトに留学し、二八人のボルシェビキの一人として政治面で活躍する沈沢民も、この頃は、兄の茅盾（沈雁冰）の教導もあつてか、北欧を中心とした文学評論や作品を、英語からと思われるが、多く訳している。そういう彼が、冰心の著作の特徴を、母の愛と子供への愛、および白話文としての流麗さに認めているのは、かなりの文学的修養と批評眼をもつていたことを証明する。彼が言わんとすることは、右に引用したように、冰心のもつ不可思議な静謐さの魅力であるが、ただここではそれを感想として述べるにとどまっていた。

二〇年代に人気があつたという言い方は、実はその後あまり評価されなくなったという言い方を内包している。一九九〇年までの七十年間、冰心は管々と文学にたずさわってきた。しかし、最初の二〇年代の活躍だけが、しかも二〇年代のほんの二、三年だけの活躍が⁽²³⁾評価され、以後は厳しく批判されるだけになり、甚しくは無視されることになる。これは一体なぜなのか。そのことを知ろうとするのが、拙文のひとつの意図である。

人気があるかどうかということ、評価されるかどうかということとは少しずれる問題であるが、今、人気の方については触れないで、評価の方について、幾つかみてみようと思う。ある批評家は、自らの理論で冰心を説明するが、それは冰心という作家をよく理解することに役立ったのであろうか。代表的なものとして成仿吾の評論をみてみることにする。⁽²⁴⁾また、ある批評家は、大いに冰心を批判するが、批判のことが理念の次元に空転して、現に存在する冰心の作品がすりぬけている。作品の外から声高に論じているにすぎない感じがする。賀玉波⁽²⁵⁾とか銭杏邨⁽²⁶⁾などがそうである。外からというのは、冰心が読者に伝えたかったものではなく、作品に書かれていることについて論じているという意味である。ものとこととを厳密に区別するのは難しいが、作品中の題材や人物、事柄などをことといい、作者が表現したかったものをものとす。作者には何か表現したいものがあつて、それを仮りに文学性というなら、この文学性によって作者は時代を経て残りうるのである。冰心を批判する批評は、単なる印

象批評を脱して、文学的価値を別に立てて論じようとするものであった。それで、冰心のものよりも、文学的価値そのものを理念的に説明し、その理念から冰心のことを解説しようとするのであった。冰心に対しての、こういう批評の先がけをなしたのが、成仿吾であった。このことは多くの示唆的問題を喚起するが、拙文では、たんにそういう事実のみを指摘するに止めたい。できることなら稿を新たにして論ずるべきと思つたからである。したがって、拙文は理論の内容をひとつひとつ吟味する方向にも、二〇年代と三〇年代との違いを紹介する方向にもない。冰心を評する人々の、時代的な気分というものを扱うにすぎない。

新文学運動といわれる、欧米近代文学を中国に導入する文学運動を、仮りに「五四時期」以後の文学と大雑把に称するならば、それは一九一〇年代後半から始まつたと言つてよからう。したがって、新文学が開始されたばかりで一九二〇年に突入するのであるが、二〇年代は、新文学の実体としての小説、詩、散文が提示され始めたときであつた。魯迅は、新文学の小説を書いたという事で、先ず意義付けられるのも、このような意味からである。というのも、例えば、小説はそれを用いて人身攻撃をする道具にほかならないとする雰囲気もあつて、林紓が上海『新申報』に、「荆生」を二月に、「妖夢」を三月に発表し、新文学運動を進める胡適や陳独秀、錢玄同などを攻撃しているのである。⁽²⁸⁾ こういう時期に、魯迅の「孔乙己」⁽²⁹⁾ や「薬」⁽³⁰⁾ などが発表されているのであるから、何はともあれ、魯迅の小説が文学として提示された意義が大きいのである。「阿Q正伝」⁽³¹⁾ は、一九二二年十二月四日から二二年二月十二日まで『晨报副鐫』に連載されたが、この小説でさえ、読者の中には自分のことをあてこすっているのではないかと思つた者がいたことを我々は知つている。⁽³²⁾ 小説がことを伝えるもので、そのうちの極端な考え方として、小説は社会的目的の手段だとする考え方があつたが、そうではなく、作者のもの、具体的に言えば思いや夢を描く文学作品であることが、社会的に定着する時期として、一九二〇年代はあつたようだ。だから、一九二〇年代は文学というものがわかり始めた時期だといつてもいい。そのための力となつた作家に、魯迅だけでなく冰心もいるぞというのが、拙文のさらなる目的のひとつでもある。

(2) 「繁星」

冰心の詩「繁星」が、『晨报副鐫』一九二二年一月一日から二六日まで連載されるが、それが巴人（魯迅）の「阿Q正伝」と時期を同じくしていることの意義を、前項で述べたような意味から、大きなこととして認め直したい。今ここでとりあげるのは詩であるが、小説と意義的にはそれほど異なるものではない。冰心が「小詩」という形式を、中国伝統の古詩や今体詩と違って提示した意義は、詩の内容が中途半端でちよつとした感想をまとめたものにすぎないといった批判があるにせよ、新詩という観点からも十分に評価すべきと思われる。

今、ほんの少し「繁星」⁽³³⁾をのぞいてみよう。

一

繁星がきらめいている――

濃紺の天空に

かつて星たちの対話を聞いたことがあるか？

沈黙のうちで

微光のうちで

星たちは深く称賛しあっている

三四

新しい陸地を作ったものは

あの押し寄せる波ではなく

その下の、細かな砂であった

四七

子供のときの友は
海浪^{なみ}

山影

きらめく夕焼

悲壮なラッパの音

わたしたちは今、疎遠になってしまったのか

八五

父よ

私は願う、わが心が

あなたの腰のサーベルのごとく

清く冷やかなることを

一一三

父よ

私はどんなにあなたを愛していることか

同じように、どんなにあなたの海も愛していることか

一二八

沸き返る怒涛

黒々とした山影――

夜は深かまった

外へ出てはなるまい

みよ!

星くずの明りのもと

軍人たる父が

ひとり司令台に立つ

一三一

大海よ

どの星が光なからう

どの花が香なからう

どの私の思考の中に

おまえの波涛の清き響がなからう

一六四

わが友よ!

さようなら

私は最後の二頁を

あなたがたのために残そう！

以上、全詩一六四首からアトランダムに引用してみたが、どの小詩にもみられるみずみずしい抒情に先ず注目させられる。「一」にみられるごとく、天空かなたの星たちにその声を聞こうとする発想が、そもそも新鮮で広大ではないか。宇宙の一隅の星を身近なものとして、自分の感情なり思いを付与しようとする発想は、いうまでもなく自己というものが確実にあるのである。しかも自己の存在がごく自然に歌われているといっている。この意味でも明らかに、近代的な香をもっている。率直に滑らかに、文言ではなく、気持ちを表現しているが、この何でもないことがどんなに衝撃的なことであつたか想像に難くない。「三四」のように、アフォリズムめいたものが多くあり、それらはどれも、それほど深い思想(35)があるとは思えないが、若々しい発想であるには違いない。「四七」や「二二八」にみられる幼児期の思い出は、「八五」の父へのイメージにみられる強き者への憧れとあいまって、淡い抒情を醸し出している。そして、「一一三」にみられるような直截な愛の告白は、たとえその対象が父であろうと海であろうと、一九一〇年代以前には考えられない発想であつた。「八五」の大海への呼びかけとともに、ここにはひとり人間がいて、その人間の心の叫びが歌われているのである。ここでは、いとも簡単に愛が表現されているではないか。ここから、あるいは深みが感じられないと言われるかもしれないし、なんら意義をもつことばもないと言われるかもしれない。しかし、氷心という作者が、「どんなにあなたの海も愛していることか」と歌つたとき、我々読者は、自分の人生の一コマと響きあうものを感じないであろうか。持続していく時間にある人生がふと切斷されて、真空の中に置かれたような、生そのものを感じないであろうか。これが文学である。ここでは、社会や家族といった世俗のしがらみがみごとに断ち切られていて、赤裸になつたひとりの人間の心がまるごと提示されたのである。作者が少女であることさえ感じられないといつてよからう。こういうことは、伝

統的な中国語では表現しえなかつたことなのである。

この「繁星」が二三年一月に一冊の詩集にまとめられ出版されたとき、最後のページは、「一六四」に歌われたごとく、「最後一頁」として空白のまま残された。このようにする機智が、みごとに時代と作者の若さとを表現している。こういう軽い行ないは、時と場所を変えれば、厭味とか臭みに転じてしまうものだ。それをそう感じさせないのは、新鮮な感覚である。新鮮な感覚をもたらししたのは若さである。ここでいう若さは、もちろん作者の年齢としての若さであるが、そればかりでなく、時代としても若く、このような軽さを喜んでとりこんだのであった。それは、「最後一頁」にみられる事象だけではなく、そういう機智を含んだ「小詩」という形式について、より顕著に言えることなのである。

この押韻もしていない変則的な「小詩」という形式が、内容の新鮮さとマッチして読者に歓迎され、類似の「小詩」を作る者を出させたが、それは、青年たちが新しい思い、すなわち伝えたいものを表現する、その手段を見つけ、定着していったのだといえよう。冰心も読者も批評家も、もしかするとまだ意識しなかつたかもしれないが、文学的感動はこのようにして確実に伝達されたのである。だからこそ、冰心の作品の愛読者が多かつたのである。のちに批評家が批判するにもかかわらず、冰心が伝達したものは、中国の人々に広く奥深く動じぬものとして残留していったと思われる。

冰心の作品を分類し整理し、それを分析し解釈することが、どれだけの意味をもつのか、正直なところ不明である。ただ、この心優しく、そして小生意気な冰心が、その後大きな波にもち上げられ、谷間に突き落とされしながら生きてきた七十年の作家生活に、中国の知識人の生き方をみたいと思つた。彼女は明らかに魯迅のようなタイプの知識人ではない。深みのなさを軽蔑され、時流に浮いてきた処世を軽蔑されるかもしれない。事実、多くの中国人や日本人（その中には私も入っていたが）に軽視され、無視されてきた。だが、そうすることは、正しい歴史の姿を認めることではなかつた。当時のありのままの姿を認めないところに、有益な考えが育たなかつたことを我々は知っているのでないか。これを知的遺産というなら、せめてこの知的遺産によって、冰心の当時のあり方を確認し、狭隘でない知識人の生き方をさぐってみたいと思う。それが拙文のひそかな意図である。

ただ、知識人の生き方については、この拙文で論じ尽くせるものではないので、拙文はその第一歩にすぎない。冰心試論とする所以である。

2 一九五〇年代の中国

一九七九年三月、人民文学出版社が『冰心選集』を再版した。この本は、五四年九月に同じ人民文学出版社より出版された『冰心小説散文選集』に、詩の部分を加えたものである。

この再版を皮切りに、冰心の作品が続々と出版された。主なものに、上海文芸出版社『冰心文集』1—5、四川人民出版社『冰心選集』1—3、福建海峡文芸出版社『冰心著訳選集』上中下、などがある。⁽³⁶⁾ 続いて、彼女の伝記も書かれた。⁽³⁷⁾ 冰心や彼女の作品に関する研究論文も、それをいちいち挙げないが、多くなった。

「四人組」打倒以後の文学状況の一つに、文化大革命時期に否定的評価を下されたり、不遇であった作家や作品について再評価し、復活させる動きがあった。他の「五四」時期の作家、たとえば葉聖陶や王統照、少し下って張天翼や巴金などにも、著作整理出版⁽³⁸⁾として伝記や作品研究の高まりがあった。

冰心、本名謝婉瑩。女。福建省福州に、一九〇〇年十月五日生まれ⁽³⁹⁾。一九九〇年十月五日には、九十歳の誕生日を迎えたので、誕生九十年及び文学活動七十年を記念して、北京で座談会が開かれている。⁽⁴⁰⁾

彼女への注目言及は、その作品の出版とともに、私にはいささか過剰な評価よりするものと思えた。⁽⁴¹⁾ というのも、冰心は、児童文学者にほかならず、⁽⁴²⁾ 作家としては中国の文学界に何らかの影響力をもつたり、意義をもつたりすることのない、⁽⁴³⁾ 過去の人⁽⁴³⁾のように思えたからである。

これまでの中国での冰心に対する評価は、そもそも高くなかった。この点について、いささか古いが、かつて経典的地位にあった文学史をみてみよう。

丁易の『中国現代文学史略』⁽⁴⁴⁾。丁易は、冰心を進歩的ブルジョア階級を代表する作家と位置付け、彼女の「斯人独憔悴」⁽⁴⁵⁾という短編小説などには、ブルジョア階級の身勝手な自己本位の考え方が表われているという。そして、中国共産党が指導する革命運動が発展すると、冰心は空虚で温和な「愛」に隠れたので、作品もだんだん少なくなったといっている⁽⁴⁶⁾。冰心の階級的位置付けが、これによってわかる。

劉綬松の『中国新文学史初稿』⁽⁴⁷⁾では、冰心の名前すら見当らない。劉綬松の階級闘争を文学面にあてはめようとする闘争の観点からは、冰心の小説も詩も散文も抜け落ちてしまったのであろう。冰心の作品の位置付けが、これによって明白になる。

日本にいち早く翻訳された、王瑤の『中国新文学史稿』⁽⁴⁸⁾では、次のようにいう。

冰心の小説は、『冰心小説集』にすべてが収められている。ほとんどが一九一九年から二三年にかけて書かれたものである。その内容はすべて「人生とは何か」を探求したものだ。このことが当時の青年たちの疑問でもあったので、「超人」が発表されると(二二年)⁽⁴⁹⁾、たちまち熱烈な歓迎を受けた。冰心の回答は、「すべてはただ愛のために(『冰心小説集』所収の「悟」より)」というものであった。

『全集』自序によれば、彼女は五四運動が起こると、燕京大学女子部の学生会の文書係になり、また女子学生連合界の救国会宣伝部の仕事をも担当した。この時期に、小説を書き始めたし、「それはほとんどが問題小説であった」。当面的問題をほぼ書き終え、ない知恵を絞って構想を考えたとき、今度は過去の思い出がいきいきとよみがえってきた。楽しかった幼児期のこと、銃を肩にした兵隊など、これらが私に多くの単純な材料を提供した。こういう思い出の中に、一知半解の浅薄で零碎な哲理をとけこませたりした(『冰心全集』自序より)。

こういったことは、彼女の創作活動が五四運動に刺激されて始まり、創作の題材が現実から見出されたことを説明している。だから、人生観、婦人解放、父と子の衝突といった問題が彼女の作品にどっと流れ込み、彼女の作品は問題小説ということになった。しかし、彼女は、自分が最初に注目した「問題」を追及し続けようとはしなかった。現実はいまにも醜く、

彼女の中庸主義はただ問題に抽象的な解答を与えるだけだった。彼女は、理想に逃げ込み、母親の懐に逃げ込んだ。彼女は温和な家の中に「愛」を感じ、社会の現実の中に「憎しみ」を感じた。彼女は「愛」でもって世界を温めようとしたが、それはもちろん実際の世界と乖離することであった。

しかし、冰心の文章は確かに流暢であった。彼女の生活趣味はプチブルのいわゆる優雅な幻想に大変よくマッチした。事実彼女は、紳士風の読者たちやたくさんのプチブル出身の若い男女に、もてはやされた（丁玲「五四雑談」「文芸報」二巻四期より）⁽⁵⁰⁾⁽⁵¹⁾。

以上が、『中国新文学史稿』で王瑤が冰心について触れた箇所である。冰心が五四運動に刺激を受けて創作活動を始めたこと。彼女の小説の意義は問題小説にあり、青年たちの疑問に答えたこと。しかしその後、婦人解放や世代の断絶といった問題を追及せず、厳しい現実に対して抽象的な「愛」に逃避し、母親の懐に逃げ込んだことなどが指摘されている。ここに、冰心についての論はほぼ尽きているといえる。

だが、右の引用文を訳出しようとしたとき、私はなかなか文意を読みとれなかった。筋が通るように訳出できたのは、茅盾の「冰心論」⁽⁵²⁾を読んだからである。というのも、ここに述べられていることのほとんどは茅盾の「冰心論」に指摘されていることであり、用語であったからである。王瑤は茅盾の「冰心論」をつぎはぎしていたといつてよい。その例として次のようなことがある。茅盾が引用している文に、「思い出がいきいきとよみがえってきて」、「楽しかった幼児期のこと」と「銃を肩にした兵隊」の二つが挙げられている。私は二つしか挙げられていないことに奇異な感じを持った。並びとしてもじっくりこない。茅盾が引用したものと文、つまり冰心の『全集』自序を見ると、「楽しかった幼児期のこと、大海、銃を肩にした兵隊」とあった。これならば、並びとしてもじっくりするし、三つではまだ少ない感じがするが、冰心は他のところで列挙しているので、ここでは適当であろう。要するに茅盾が引用する際、「大海」が落ちてしまったのである。

茅盾は、三四年に「冰心論」を書いた。この論において、冰心の創作活動を三期に分け、第一期には「微笑と涙」、第二期に

は「愛と憎しみ」という相対立する重要な二つの要素を指摘し、それらが当時（一九二〇年頃から二三年頃）の青年たちの心情を掬い上げたがゆえに、冰心は彼らから熱烈に歓迎されたと論ずる。だが、第三期に当たると論ずる三〇年前後は、⁽⁵³⁾冰心の持つ「中庸思想」が抽象的な「愛」を持ち出させ、神秘主義が強くなった。すなわち、現実乖離がみられ、今後出路を探し出せるだろうかと思念を表明して論を結んでいる。冰心の第一期の特色としてみられる「微笑と涙」が、「理想と現実」を象徴していると論じている中に、冰心の自序を引用しているのだが、そこで茅盾が「大海」を落としてしまったのは、とりわけ意があつてのことではなく、単なる不注意なのかもしれない。

ただ、王瑤は、冰心の自序に直接当たることなく、茅盾の引用をそのまま孫引きしてしまったのである。このことは、それなりに大きな問題であろう。しかし今は、王瑤が茅盾の論に全面的に心服していたことを示す傍証になる、とだけいっておこう。

冰心については、茅盾の論が論じ尽くして、その後もこれを踏襲してほとんど差しつかえないものであった。ただ不足しているのは、階級観点が濃厚でないことであろう。そこで、プチブルの子供たちに受容されたとする、丁玲のことが付け加えられたのであろう。冰心がプチブル階級から歓迎され、その枠を越えられなかったとする、いかにも階級的観点からの判断らしい判断を下しているようにとれる。ここに、新文学史の「新」があつたのだといえるかもしれない。もともと、この丁玲のことは、けつして教条的な生硬なものではない。だから、むしろ好意的ともいえる丁玲のことが引用したところに、王瑤の苦心があつたのかもしれないし、また、王瑤が、ほかならぬ丁玲のことが引用したところに、丁玲の五〇年代初期における権威がうかがわれるともいえる。

こういったことは冰心のことからはずれた問題であるので、今は触れないが、冰心の評価が評者の時代や観点をみごとに反映していることに感心しないわけにはいかない。

丁易、劉綏松、王瑤の三つの文学史からいえる冰心の評価のイメージは、次のようなものとなろう。

解放後の文学の主流である、階級闘争を下敷にする「人民文学」からは、冰心の作品ははじき出されることとなり、彼女及び

彼女の作品は、現実の発展に合わなくなった過去のものとして評価される。冰心はわずかに児童文学の面に認められるにすぎなかった。

これらの評価はどれも、当時の時代の要請からなされた評価であること、いうまでもない。

3 一九三〇年代後半の日本

日本においても、冰心は早くから「過去の作家」とみなされていた。⁽⁵⁴⁾

昭和一二（一九三七）年、陣ノ内宜男は『中国文学』月報二八号に、「冰心素描」を発表した。ここで陣ノ内は、冰心を「近代思想の洗礼を禀けた最初の中国閩秀作家」として紹介し、小説、詩、散文の三分野からその特色を論じている。その中で、次のようなところがある。

「去国」⁽⁵⁷⁾は冰心の代表作として有名である。其の荒筋は、主人公英士が、米国留学から、七年ぶりで動乱の祖国に帰って来る。祖国の革命工作に貢献しようと健気な希望に燃えて帰国するのだが、現状に幻滅の悲哀を感じて、再び米国に帰ってゆくといふのである。若しも冰心に革命時代の作家魂さへあるなら、彼女は必ず英士を混乱の祖国に引き留めたことであらう。吾々の期待する中国初期の文学は、そこから誕生しなければならなかったのである。⁽⁵⁸⁾

陣ノ内の紹介は、「冰心は革命時代に処する作家的情熱に乏しい」というところからなされているので、小説、詩、散文ともに厳しい評価をしている。その中では、散文が三つの分野では優れているといっている。ただ、陣ノ内における「革命工作」なり「革命時代」というものは、どうやら辛亥革命時期だけでなく、昭和一二年の現在までを含めていっているようだ。短編小説「去国」の主人公英士の父は、アメリカ留学中に革命が起ったので急遽帰国したが、英士は父の帰国と入れ違いにアメリカへ建築学を学びに留学し、七年後帰国したという設定である。中華民国への希望と期待をもって仕事しようと帰国したのであるから、「革命工作」といえないこともないが、むしろここでいう陣ノ内の用語と雰囲気は、昭和一二（一九三七）年前後の中国を想定

しているように思える。そこで陣ノ内は、本文の素描が終わった後、付記を書き、創作活動を既に終わったかの感ある冰心の紹介は少しく遅播きの憾はあるが、冰心は「中国一流の閨秀作家として今日なほ令名高い」⁽⁶⁰⁾から素描を試みたと断わっているのである。

昭和一二年頃の日本の中国文学認識は、前年の魯迅の死、および『大魯迅全集』の配本開始によって、魯迅についての言及が散見するものの、抗日運動の高まりが中国現地にあっても、ほとんど知らされぬ状態になりつつあった。

それにしても、最近の支那と日本の関係ほど薄気味悪い時代はあるまい。我々は何にも知らず又知らされもしないから平然として居らるのであるが、こんな断片的に洩れて来る記事を仲介として考へて見る時に、言はうやうのない不安と焦燥とに心を嘔まれる思ひがする。⁽⁶²⁾

神近市子がこう言うように、何も知らされずわからない状況が進みつつあったのである。そして、七月七日の蘆溝橋事件以来、日本は侵略戦争を拡大し、とても文学の交流どころではなくなる。右の引用文中の「断片的に洩れて来る記事」とは、改造社の山本実彦が魯迅夫人を尋ねたとき、八歳の周海嬰が悲憤慷慨して二十五ヶ年計画で日本をやっつけると客達に語ったという話である。⁽⁶³⁾

「満州事変」以後、相次で北京事件、綏遠事件と日本側の稚拙な○○○○方法⁽⁶⁴⁾によって中国人の感情をすべて反日一辺倒にしてしまったと、張赫宙が『報知新聞』の「文学者の対支関心」で指摘している。⁽⁶⁵⁾この「文学者の対支関心」シリーズでは、第四回に中野重治が、「中国支那は二つの部分に分れてゐる。日本には一つの政府しかないが中国には二つの政府がある。あるひは二つの政権がある」と、西安にはいった毛沢東の存在を知っていることを述べている。⁽⁶⁷⁾また先の張赫宙が、「国防文学」が唱えられていることを、非難する形で紹介しているが、総じて言えば、当時の中国の作家や作品についての知識は少なかった。⁽⁶⁹⁾

次いで昭和一三年五月、猪俣庄八は『中国文学』月報三八号で、冰心の「超人」を訳出し、その後に付記した「解説」で、次のように付け加える。

超人は一九二一年に発表された民国最初の女流作家謝冰心の出世作と称されてゐる。愛一元を信じて超人の存在を否定せんとする女性らしき純美なる魂のおののきは全篇ににじみ出てゐる。そしてそれは曾て中国青年子女の悩める切実な人生問題でもあつた。然しそれは既に過去のものであるかも知れない。その余りの抽象性の故に――⁽⁷⁰⁾

猪俣の方がやや控え目であるが、やはり時代遅れ、「過去のもの」という認識がある。「曾て中国青年子女の」「切実な人生問題」であつたことに意義を認め、それを今紹介することの口実にしているが、「純美なる魂のおののき」が感じられるからこそ、発表後十七年もたつていながら、冰心の「超人」を訳出したのであろう。

昭和一四（一九三九）年四月の『中国文学』月報四九号では、飯塚朗が「冰心の脆弱性」を書いている。論自体は賀玉波の冰心論⁽⁷¹⁾を参考にしてゐるが、この文章は、飯塚が北京にやつて来て、新文学の本が少いことに驚いたことをきっかけとしてゐる。

いやになるほど見せられるものは、旧小説の貧弱な俗本のみである。兒女英雄伝、小五義、包公案、桃花扇、紅樓夢……等々。新しいものといへば、啼笑因縁の類が、俗な表紙絵をさらけ出してゐる始末である。

さうした中に、割合多く眼に触れたものは冰心の作品であつた。而して、徐志摩の詩集などが、十銭位で買へるといふのに、冰心のものは割に高い。現在でも、冰心の作品が、北京の人に割と読まれてゐるらしい。(略)支那事変を一期画⁽⁷²⁾として、中断された支那現代文学、そしてめまぐるしい変化の段階にあり乍ら、何処かまだまだ深い眠りにある北京に於ては、冰心あつたりの脆弱性でも研究してみるのが恰好な仕事であるのかも知れない。⁽⁷²⁾

飯塚の論には、一つは、過去のものと思つてゐた冰心が今でも割と読まれてゐるらしいことを発見した驚きがある。その発見が今なせ冰心を取りあげるかという問いへの回答としてある。また一つは、「支那事変」以後、侵略国の知識人として自分が存在していることを、めぼしき本もなく、文学者とも接触できぬという目前の文学的空白によって、痛感させられてゐる。その忸怩たる思いを、投げやりになり野放図になりそうな自分を抑さえて耐えようとするぎりぎりのところで、論を書いている。だから、次のように言うとき、冰心に対していうよりも、自分に言いきかせてゐるかのようである。

冰心が描き出すところのものは、有閑階級の安逸な生活の讚美であり、自然美と肉親愛とがその要素となつてゐる。冰心に対して、痛ましい社会の毒悪を写せと云ても無理な註文である。所詮はキリスト教的な博愛と空虚な同情しか持つことは出来ない作家であらう。

冰心が社会の根本問題に対して、盲目であると攻撃する向きもある。然し私は強ち之を攻めようとは思はない。⁽⁷³⁾飯塚の冰心に寄せる精一杯の同情は、飯塚自身の不安な立場に対する精一杯の激励でもある。ここに時代が表われているといえよう。

以上の、日本における評価も、冰心が現状に影響力を持つ作家ではなく、すでに「過去の作家」であることを認める点で一致している。だが、抽象的で「過去の作家」であつたからこそ、冰心は当時安心してとりあげられたのだと言えないこともない。⁽⁷⁴⁾ついでに言えば、陣ノ内も飯塚も、冰心の散文を高く評価しており、とりわけ『寄小読者』⁽⁷⁵⁾については次のように激賞している。

特に海を描く時は、神韻縹緲として、頓に生彩を増してくる。一種海の精霊ともいふべきものが、冰心の筆端には迸つてゐる。⁽⁷⁶⁾

日本における冰心の評価は、その後一変する。昭和二〇（一九四五）年、日本が中国との戦争に敗れたからである。冰心は、夫呉文藻が日本に大使館付文官として着任するに伴い、四六年十一月日本にやって来た。以後五年ほど滞在したが、その間、東京大学で講義をしたのを始め、数々の講演をおこなつてゐる。冰心自身も、新しい中国の動きや文学を伝える意気に燃えていた。⁽⁷⁸⁾中華人民共和国になつてから、計五回来日している。⁽⁷⁹⁾冰心はそのたびごとに散文を書きのこしている。⁽⁸⁰⁾しかし、日本での冰心の研究はあまり多くないようである。

第二節で、中国の五〇年代初めの評価を、第三節で、日本の三〇年代後半の評価をみた。王瑤と飯塚朗を主としてみたが、それはどちらも、冰心を冰心が活躍した時代に即して評価するというよりも、評者への時代的要請なり情況にもとづいて冰心を説明しようとするものであったといえよう。

一九五四年七月一三日に書かれた冰心の「自序」⁽⁸¹⁾では、自分が創作を始めたときは反帝反封建のブルジョア民主革命の新段階にあった。しかし当時の社会の暗黒面を暴露しただけで、光明を探せなかったといい、

その原因は、私には光明を探しに行く勇氣がなかったのだ。その結果、私は狭隘な家庭の枠に退き逃避して、階級社会では実現不可能な「人類の愛」を描写し推賞したのであった。⁽⁸²⁾

という。そして、こんな貧弱で空虚なものを選んで出版するのも、「五四運動」以来、一定の段階を経て発展してきたのだから、その段階の隅っこにある小さな石とみなしてもらえばいいからだと書いている。

五一年八月、冰心は夫呉文藻とともに二児をつれて祖国に帰った。日本から秘密裡に香港に行き大陸に入るといふ危険を犯しての行動であった。光明にあふれた中華人民共和国の建設に参加する、勇氣ある選択をしたのである。だから、昔は「勇氣がなかったのだ」といえたのであろう。また、自からを一つの段階の隅にある小石とするのも、卑下というよりは、新中国の建設に参加できる喜びよりする謙遜とみなすことができるであろう。

冰心は、この五四年の「自序」を、七九年出版の『冰心選集』の「自序」としてほぼそのまま使用している。一見、何の問題もないようだが、一ヶ所削除したところがある。⁽⁸³⁾ 最後の方で、新文学の潮流は一段一段の過程があり、この過程はまるで一段一段の石段のようで、社会主義リアリズムの大門に通じている、という。この「社会主義リアリズムの大門に通じている」という部分を削除した。ソ連からの社会主義リアリズムが提唱されていた五四年と、五八年の「革命的ロマンチズムと革命的リアリ

ズムの結合」の提唱や文化大革命中のめまぐるしく変った数々のスローガンを経た二五年後の一九七九年とでは、ことばにも差異が生じていて、「社会主義リアリズム」などということばは削除せざるをえなかったたのであろう。ということは、同じことばにしても、五四年と七九年とでは解釈が異なる場合もあろう。たとえば、「階級社会では実現不可能な、「人類の愛」を描写し推奨した」という、その「階級社会」についても、五七年に夫呉文藻が「右派」にされ、文化大革命では自分も「文芸黒い糸」の一味として批判された後では、全面的に肯定されるプラス評価の社会ではなかったであろう。したがって、「人類の愛」も否定されるべきマイナスの評価をもったものとは限らないはずである。「人類の愛」なるものも、とらえなおさねばなるまい。

唐弢主編の『現代中国文学史』では、

作者はこのように「愛」の哲学を謳歌し、母の愛や童真をほとんど世を救う福音書のごとくにみなしている。これは、彼女自身にとってはたしかに「心中の風雨」を避け、内心の平静を求めめることのできるものであったろうが、読者にとっては、多少なりとも現実闘争から逃避させる役割をなすものであった。⁽⁸⁴⁾

と手厳しいが、それでも全面的に否定するのではなく、冰心における意味付けと客観的な役割とに分けて評価をなそうとするものである。

のちの「夢」「往事(二)」「寄小讀者」「山中雜記」も、読者に抒情詩と風景画に似た美しさを与える。これら大部分は国外で書かれた。しかし、その中に描かれているのは資本主義国家を思慕する情では決してない。あるのは、祖国や故郷や家族を懐かしむ情である。母の愛や童真の類は、作品中にあいかわらず重要な位置を占めているけれども、色調が変化し、幻想が破れた後の失望や人生の意義を迫及して解答を得られない苦悩、また幼児期を追憶するときに帯びる悵惘や哀愁が増えた。ときには、労々辛苦する人民に対する同情と讚嘆とを表明することもある。⁽⁸⁵⁾

このように、「愛の哲学」の抽象性だけを問題にするのではなく、作品にそって幅広く表われた、愛国とか労働といった他の要素にも触れて、冰心の多様な面をみようとしている。

この「愛」の思想の指導のもとに、彼女の現実社会に対する関心は少なくなった。そして自らを「狭隘な家庭の枠の中に」および大自然の天地の中に「退き逃避」させ、抽象的な愛の観念から出発して、母の愛を推賞し、童貞を推賞し、自然を推賞して、「階級社会では実現不可能な、人類の愛、を推賞した（『冰心小説散文選集』自序より）」⁽⁸⁶⁾。盧啓元も、このように冰心が家庭内だけに限定されるのではなく、大自然を推賞した描写もあると拡大することによって、冰心の作品の評価をとらえ直そうとしている。それは、劉家鳴の次のようなことばに引き継がれているのである。

冰心の愛の哲学は、母の愛、童心、大自然という三つを主な内容としており、この三者が彼女の作品中に鼎立している。だが実のところ、彼女の創作にはほかに、祖国や労働人民に対する真摯で深い愛情が内包されている。⁽⁸⁷⁾

以上が、「四人組」打倒以後の評価の代表的なものである。唐弢、盧啓元、劉家鳴の三者ともなるべく作品に即して、冰心のプラスの面を評価しようとするものである。そのため、愛国的であったとか労働人民への同情があるということが強調されているようだ。まだ、階級観点や文学に直接的功利性を求める観点から脱却していないとはいえるが。

一九八六年八月に書かれた、李沢厚の「二十世紀中国文芸一瞥」⁽⁸⁸⁾は、右のような拘束から解放された視点に立つところに特色がある。冰心についても、彼女の「母の愛」というものが、伝統倫理にのっとりたそれではなく、新しい「母の愛」であったことを指摘する。

冰心は、極く平凡な母と子の感情を、実体の世界にもちこんだのである。

造物者よ――

もし永遠なる生命のうちで

一度だけ至福を許して下さるならば

私は真心より願おう

私が母親の懐に抱かれ

冰心と「大海」

母が小舟に乗り

舟が月明かりの大海に浮かぶよう”〔春水⁽⁸⁹⁾〕一〇五)

風雨^{あらし}が、恐怖^{おそ}が、煩惱^{ぼんごう}が、憂愁^{ゆうしゅう}が、そして汚濁^{おご}した世界全体すべてが、この偉大で普遍的な母の愛によって消滅し洗淨される。この愛は少しも具体的な社会や時代的内容がないようであるが、かえって覺醒した新時代の心の声を反映しているのだ。少年の稚氣に満ちあふれた新世代の知識者にとっては、愛は先ず母の愛であり、それは近代汎神論の哲理の光にきらめいていた。

優しい心情にあふれた”父母の胸元や、姉妹兄弟にはさまれて”〔寄小読者⁽⁹⁰⁾〕通信一〕冰心は、中国伝統の血縁倫理道德の感情を、”人類は母の愛の光のもとで、それぞれが自由で、ひとりひとり平等”〔寄小読者⁽⁹⁰⁾〕通信一二〕という宇宙の光と心理実体に拡大したのである⁽⁹¹⁾。

李沢厚は、理念上認識されたかどうかの次元ではなく、心理状態という実体の世界に、思想が到達し定着したかどうかを問題にしている。したがって、冰心の”母の愛”が抽象的であるとか、階級観点からプチブル的であるとかいう問題ではなく、それは”新世代の知識者”の”心の声”であったと指摘しているのである。

この視点は大きなことを教える。一つの固定した観点から文学史をとらえることが、どれほどの益をもたらしただろうかという反省をおこさせる。そして、作家をとらえるとき、やはり当時の状況のもとにおいてとらえることが必要であるということも。冰心はまだ生きている。それどころか、今なおものを書いて⁽⁹²⁾いる。この九十歳を越えた作家を、やっと八〇年代後半になって、まともに評価するようになったといえよう。

二 初期作品について

1 ジャーナリスティックなセンス

(1) 「兩個家庭」

冰心の最初の作品は、「兩個家庭」である。作品表を見て頂きたい。この表は、「晨報」文芸欄に載った小説を、民国八（一九一九）年から民国九（一九二〇）年の半年足らずの期間であるが、一覧にしたものである。

謝婉瑩は、「兩個家庭」を発表したとき、初めて「冰心」というペンネームを使用した。「晨報」の編集部がその下に「女士」をつけて掲載したので、以後「冰心女士」として名が伝わることとなった。冰心とつけたのは、一つには筆画が簡単で、自分の本名の「瑩」という字の意味「美しい石」にふさわしいからであった。また一つには、臆病者であるので、他人から作品のことを笑われたり、とやかく言われたくなく、このペンネームなら新しく、「謝婉瑩」と関係ない別人物と思われるであろうと予測したからであった。¹⁾

「兩個家庭」のあらすじ

私は二ヶ月ほど前、学校で李博士の「家庭と国家の関係」という講演を聞いた。²⁾ それは、家庭の幸福や苦痛が男子の事業建設能力に与える影響といった内容の話であった。その帰路、車（人力車）で帰る途中、いとこに呼びとめられた。いとこはいつものように私にお話をせがむ。何の話がいいか考えているときに、隣から子供の泣き声が聞こえてきた。裏庭の垣根ごしののぞいてみると、子供が三人おり、それぞれに乳母がついている。その一人が大声で泣いていたのである。母親の陳太太が起きたままの姿で出てきて、やっと子供を泣きやませる。そしてお金を与え、三人の子供を乳母とともに外へ遊びに行かせた。陳太太は電

話で呼び出され、着飾って外出する。マージャンの相手に呼ばれたのである。しばらくして主人の陳華民が帰宅するが、家からかつており、出迎える者もない。陳華民は、子供たちが街へ遊びに出たきり戻ってこないことを知ると腹を立てて、どこかへ出て行ってしまふ。

翌日の日曜日、おじが北京へ来たことを私は知って、おじの家へ遊びに行く。おじの奥さんは私の学校の先輩である。彼女は子供をしっかりとしつけ、客の私に挨拶させる。また、召使いにも字を覚えさせている。本人はおじと一緒に翻訳をして、英語能力を高めている。そこへ、陳華民がおじとイギリスへ留学した仲間のよしみで尋ねて来る。彼は、「こんな時勢に遊びもせず、酒も飲まずして、いったい何をしろというのか」と愚痴をこぼす。留学から帰国しても、政府は彼を閑職につけただけだ。自暴自棄になってはいけないうおじの忠告に対して、陳華民は自分の家が家庭として成立していかないことを訴える。

二ヶ月の夏休みが過ぎた。学校から帰ると、おじが来ていた。おじは、自殺した陳華民の葬式の帰りであった。私の母親は陳華民の自殺を聞いて、陳さんの才能と学識はイギリスの学生以上であったのに、家庭がうまくいかないからこんな結果になったのだ、本当に惜しいことだと言ひ、彼の奥さんが故郷に戻ったと聞いて、あの奥さんも学校教育を受けておれば自立できただろうにと嘆くのであった。

以上があらすじである。二つの家庭が対比的に描かれ、同じイギリス留学の有為の男性を、奥さんの生活態度の違いによって、生かすことにも殺すことにもなることを描いている。「私」の家も、陳華民の家もおじの家も、電話、自家用車（人力車）、ピアノなどがあるし、使用人もいる。かなり高級な生活をしているので、第一章第二節に引いた丁易などの、ブルジョア階級の生活を描いているという評価になるのである。素材については、当時の女学校に娘を入れるような家庭がどんなものであるか、また、留学帰りの者の生活状態がどんなものであるかが具体的によくわかるとだけいっておこう。

この小説のテーマが、理想的な家庭夫人を描くことにあるのは、明らかであろう。それは先ず、子供のしつけがやれることである。次に、使用人をうまく管理し円滑に使用できることである。つまり、家庭運営がうまくできねばならない。この家庭夫人

像は、きわめて常識的なものに思える。ただ、その上で主婦は、主人と同じ作業たとえば英語の翻訳などができねばならない。時にはピアノを弾き、優雅に憂情を解き放たねばならない。これが、新しいところ、独特なところであろう。

英語に代表される西欧の文化に目を向け、自主的に受け入れようとしていること、これが新しいことの核、理想像の核である。これは当時の時代的雰囲気であった。この作品が、人物を集中的に描いて、新と旧の思想的ギャップを浮き上がらせようとするものでないことは明瞭であろう。描かれているのは、当時の風俗である。だから、理想像に対して、生活が不規則で、子供のしつけもろくにしない、そして夫などは放っておいて、着飾ってマージャンに行く主婦がまるで見てきたように描かれる。マージャンなどの遊興に代表される伝統的悪弊に沈溺している、社会の一方の現状がとらえられている。無教養で、伝統から脱出して新たな歩みを始める力がどこにもない。非難されるべき「旧」の細かな描写は、理想像としてある「新」を、イメージとして伝えている。

(2) 「『破壊与建設時代』的女学生」

「兩個家庭」は小説として、『晨报』の文芸欄に、民国八（一九一九）年九月一八日から二二日まで連載されたが、冰心はその二週間ほど前の九月四日に、「『破壊与建設時代』的女学生」を発表している。（表参照）。「自由論壇」欄に、「女学生謝婉瑩投稿」として掲載されたこの文章をみてみよう。

先ず、「女学生」という三字がここ数十年に発生した新しいことばであり、社会における意味あいには三段階があったことを述べる。一、女学生を崇拜した時期。「自由」「平等」「革命」といったことばが一般青年に広まった時期で、同時に「女学生」ということばも入った。「女子参政」「男女開放」ということばも同時期で、欧米の女学生をモデルとし、中国女性を束縛している旧道徳をひっくり返そうとした。社会は新奇なものを見る目に対応したが、尊敬の念がこのことばには含まれていた。二、「女学生」は不良分子の名となり、社会が嫌悪する時期。女学校は社会通念から逸脱することを奨励し、女学生は大言壮語ばかり言

う。学校に入る女子が少なくなった。三、この世は悪がなければ善を明らかにすることができない。そう考えて、今第三時代の「女学生」は、第二期の社会が嫌悪する心理を破壊しなければならない。そして、中国女子教育の新しい基礎を建設し、将来のたくさんの女子を光明に導くべく努力しなければならない。

次に、ではどうやってこの事業を成し遂げ、社会の信頼を得るか。十項目を列挙する。1 華美な装飾をしないこと。2 「家庭衛生」「人生常識」といった実用的で穏健な題で、無教養な婦人を導くべきで、大言壮語しないこと。3 「劇場」などの刺激の強い所へ、しょっちゅう行かぬこと。4 正当で高尚な「學術講演会」や「音楽会」に出かけて教養を補うこと。5 読書によってその日の考えが影響されるので、価値ある新聞雑誌を読むこと。6 世界の「新潮流」を知り、「世界と国家の大事」や「欧米近代女子教育の趨勢」に注目すること。7 「天然の美」を感じ理解すること。8 友を大事に選ぶこと。9 「秩序」あり「精神的」な男女の「団体」を通じて社会に接近すること。10 「教育の普及」「家庭の改良」を目的とすること。以上のような十項目を実行して、「女学生」を嫌悪する社会の心理と奮闘し始めよう、と結ぶ。

右のまとめからわかるように、この文章は決して社会学的な論文ではない。氷心が思いついた善行を、素直な論理でつないだ文章にすぎない。社会現象を具体的に研究したものではないが、当時の社会に漂う雰囲気はよくわかる。ここには、誠実、純粹、稚拙といった印象を与えるものが、素直に語られていて、樂觀的な作者の態度からは、あっけらかんとしたふてぶてしさ、あるいは凶々しささえ伝わってくる。たとえば項目5のところでは、例として、『新中国少年の模範』という本を読むと一日中精神がひきまがるが、『西遊記』などを読むと、この日の思考は荒誕になる、などと実に安易な論をなしているのである。それにもかかわらず、文中に出る用語やその使い方が新鮮で、晦渋ではない。また、この世に悪がなければ善が顕著になれないといったような警句に似た、並でない視点もあり、読ませる文になっている。問題の共時性、新鮮な用語、わかりやすい文、ハッとさせる視点、一口で言えば、きわめてジャーナリストティックであったといえよう。

「兩個家庭」という短編小説は、当時の冰心が理想とする家庭婦人の像が、それほど深刻なものとしてではなく、ジャーナリストイックな扱いで描かれていたのである。

このような理想的な家庭婦人あるいは女の生き方というのは、当時においても大きな問題で、社会問題であった。こういう問題に対して、そのあり方を一つの解答として提示するのが小説の役割であった。これが、第一章第二節で引用した、王瑤、茅盾などが言及していた「問題小説⁽³⁾」というものである。

たとえば、冰心の「兩個家庭」の連載が終わった二日後の、小説「白受了一番痛苦」をみてみよう（表参照）。宋懷玉女士の作品である。宋懷玉女士という人物については、何もわからない。

主人公は、朱蕉君という蘇州女子師範を卒業した女性である。父が結婚相手として紹介した銀行員を、学歴が低くて釣り合わないのと断り、米國留学した男と結婚する。しかし一ヶ月も過ぎると、その男の方から、英語もわからず、ただ服従するばかりで、精神的な助力にならないと言われる。以後、夫婦喧嘩が始まり、結局離婚する。別れてからの朱蕉君は、昼は小学校の教師をし、夜は英語を独習して、米國に行き、一七年に米國の大學を卒業して錦を飾って帰国した。今は独身主義を唱えているという話である。

右のまとめから、この作品も女がいかに生きるか、どのような結婚生活をすべきかがテーマとなっていることがわかる。この作品は、当時の社会問題をあまりにもストレートに提出していて、これでも小説かと思わぬでもない。というのも、ただ事柄を次々と述べつらねるだけで、筋だけを述べた作品にすぎないからである。書き方も、固定した作者の時間から、主人公の大學卒業時、結婚前と後、離婚時、その後の発憤と成功までを書く。過去も現在も人物の感情思考は一つで、動きも変化もない作文にすぎない。だから描写の場がないのである。

冰心の「兩個家庭」を現在からみて、いかに稚拙であり欠点が多いかを論ずるのは易しい。しかし、この作品が発表された当

時の状況においてみるならば、たまたま宋懷玉女士の作品一篇しか例にあげなかったけれど、どんなに近代的な小説らしい小説であるか。そして、他の作品にくらべてすぐれていたかがわかるのである。だから、冰心の小説のテーマの意義や、当時の問題意識とのかかわりについて論ずるよりも、より大切なことは、冰心の作品が小説として存在したということを描き出すことであると思う。当時においては、意義や問題意識がストレートに書かれた作品は、一例として宋懷玉女士の作品を挙げたが、いくらでもあったのである。また、そういう意義や問題意識ばかりをあまり過剰に追究することが、大して役に立つものでなかったことを、第一章でみたといってもいい。むしろ、小説というものが社会に定着していくにあたって、冰心の作品が大きな役割を果たしたことを指摘する方が大切なのである。冰心の作品が読者に受け入れられた理由の一つが、ここにある。

そもそも小説とは何であるか、どんなものであるかという問題は、大変難しい問題である。小説とは、本当に存在しているらしい人物を通じて、現在の社会的関心事をテーマにして、話を語るのだ。こういった程度の認識で、冰心は書き出したし、他の者も書き出したのである。それは、作者個人についていっても、模倣し習作する時期であったが、時代的にも、西欧小説を模範として習作する時期であったといっているであろう。このことは、『晨报』の文芸欄を半年ほどみただけでもよくわかることである（表参照）。いかに翻訳が多く、翻訳に力が注がれていたか。いかに社会的関心が外国の小説に向いていたかがわかり、驚くくらいである。それは一方で、中国側に作家らしい作家がいなかったことでもあろう。「表」によって知ることができる作者といえば、晨曦⁽⁴⁾、止水⁽⁵⁾といった者にすぎない。冰心の活躍が目につくが、なぜ冰心がこんなに活躍できたかの理由の一つは、このように、他にしかるべき力を備えた作者がいなかったところにある。

宋懷玉女士が「白受了一番痛苦」の中で、主人公や相手方の名前や出身校、職業地位などをいちいち書き、何年の卒業まで明記しているのは、話にリアリティをもたせるためである。話がまったくの作り話でないことを意識してのことで、その背後には、小説が虚構であるものの、まったくのウソの話では意味がないとする小説観がある。ただしここでは、小説観を検討するわけではない。こういった小説観は中国において広くみられることで、冰心を含めてそんなに違うものではないからである。むしろ、

話にリアリティを持たせるために、冰心はどのような工夫をしたかをみてみよう。

しばらくすると陳太太は髪をとかし終わった。ちやうど顔を洗っているとき、奥の部屋の電話が鳴るのが聞こえた。王媽が電話の応対に行き、戻って来て言う、「奥さま、高様からの催促でございます。マージャンのお客様がもうすっかりそろったとのございます」。陳太太は白粉を塗りながら、「すぐ伺いますと言ってちょうだい」と言った。それから奥へ入っていった。

私は我を忘れて見ていて、ずっと立ったままであった。いとこが、「あの人たちはみんな行ってしまった。私たちももう行きましようよ」と言ったが、私は手を振って、「もうちよつと待って。急ぐことないでしょ」と言った。

十分たった。陳太太は寶石ですつかり飾り立てて出て来た。台所の入口まで来ると、戸口の柱に右手をかけ、台所の中のお手伝いさんに言った、「高さんのところがせき立てるから、私は夕飯は食べませんよ。子供たちも家にいません。旦那様がお帰りになったら、そうお伝えしておくれよ」。言い終わると身をひるがえして出て行った。

右のような場面を、当時十九歳で小説を初めて書いた少女が書いたことに驚きを覚える。そして、ここに引用したのは、同じ「両個家庭」の中の描写でも、とりわけすぐれた箇所でもないにもかかわらず、少しく『晨报』という新聞の文芸欄をくつてみて、他の小説と読みくらべるならば、どんなに生彩を放つか感得することができる。『新青年』でも『新潮』でもいいが、僅かに魯迅の「孔乙己」や「薬」ぐらいが小説らしい小説と認められるくらいではなからうか。

この場面は、「私」が垣根越しに隣家の陳家をのぞき見しているところである。作中人物の「私」に読者の視点が一致させられており、私がのぞき見たそのままが読者の世界である。したがって「私」そのものにもリアリティをもたせねばならない。いとこが戻ろうとするのに、手を振ってまだ見ると言ってみたりする。十分たったそうであるが、陳太太がすっかり着飾って出て来るにはそのくらいの間が必要かもしれない。こうして臨場感を強く感じさせる。人物の陳太太も実に細かに描写される。台所のお手伝いさんに声掛けるところも、その事柄だけでなく、入口まで進み、その戸口の柱に右手をかけて話をしている。まる

で実際の人物がそこで本当にそういう動作をしているかのようではないか。こういう、事柄だけでない余計な描写が、陳太太の人となりを読者に伝えるのである。

冰心の小説は、その最初からして「問題小説」といわれるように、ジャーナリスティックに当時の社会問題をつかみとっていた。それを、筋を追うだけとか題材の奇抜さによるだけでない、描写のある小説として提示したところに、他とは違った伝達力を持つことができたのである。新聞小説にすぎぬにせよ、臨場感のある、つまりリアリティのある小説が「兩個家庭」であった。

2 傍 観 者

(1) 「斯人独憔悴」

次に「斯人独憔悴」¹⁰をみてみよう。まず、あらすじを述べる。

天津郊外の軍人の家に、一七歳の穎石が南京学堂から連れ戻される。息子たちが学生運動に参加していることを、南京学堂の校長からの手紙で知り、父親が急遽呼び戻したのである。父は穎石に、「お前たちは言いつけ通り勉強しないで、わしにたてつくのか」と怒鳴り、「青島問題だって、日本兵がやって来たら学生などはすぐ逃げてしまい、結局は政府がやることになるのではないか」と決めつけ、穎石のことにばに耳を傾けない。兄の穎銘の方は、街で演説中、軍隊に腕を刺され治療中であったが、ただちに連れ戻されることになる。姉穎貞の心配や気づかいをよそに、兄弟は荷物を検査され、雑誌や印刷物を破かれ、軟禁状態になる。ある日、南京学堂から開学通知が来るが、父親はコネを使って兄弟二人を役所勤務につけることを決定する。姉の意見に対しても、父は勉強など落着いてからしたらいいのだと言ってとりあわない。これを聞いて、弟の穎石は泣き出し、兄の穎銘は杜甫の詩句「冠蓋京華に満つるに 斯の人独り憔悴す」¹¹を口ずさむのであった。

「斯人独憔悴」という短編小説は、学生団が三幕の劇にして、二〇年一月九日新明戲院で上演した。その劇評を書いたのは止水（蒲伯英）¹²である。止水によれば好評であるが、穎石を演じた者が演説調になることを注意している。また、「五四」後の話

であるのに、俳優がみな冬服を着ているのはどうであろうかと思ひを提している。いずれにせよ、すばやい劇への改作上演は、この作品がいかに社会的関心に一致したか、とりわけ学生たちの心情にいかにか訴えるものがあつたかを示すものである。

この小説の背景は、北京の「五四運動」である。冰心が「五四運動」に参加していたことは、第一章第二節の、王瑤、茅盾の引用、実は冰心の『全集』自序に触れてあつた。当時冰心は一九歳で、協和女子大学の理科預科におり、医者になろうと思つていた。体の弱い母親を診察できる女医になろうというのが直接の動機であつた。五月初め、弟の為傑が猩紅熱を患い、その後遺症で耳の手術をした。五月四日も、東交民巷東口にある德国医院ドイツにいた。東城中剪子巷にある冰心の家から、お手伝いさんが病院へ来る途中で大学生のデモに会い、その様子を冰心に告げたのであつた。五月六日、学生連合会が成立したのにもなつて、協和女子大学も学生会を組織し、北京女学界連合会に参加した。冰心は預科一年級の学生であつたが、文を書くのがうまかつたので、選ばれて協和女子大学自治会の「文書」⁽¹³⁾になつた。冰心は連合会宣伝部のメンバーとなつた。會議に参加するのは上級生であつたが、文字宣伝の仕事をやらされることになつた。六月、大量逮捕が始まると、女子学生たちは文具や刺繍入りのハンカチなどの日用品を作つて街へ売りに出た。募金活動もした。冰心はこういう社会活動(14)にも参加している。

さて、冰心が文章を書いて新聞に発表しようとしたとき、思い当つたのは、当時『晨报』の編集委員をしていた劉放園(15)である。冰心の十七歳年上のいところである。彼は、『晨报』を家に送つてくれていた。そこで、原稿のことを電話で相談すると、劉は、とにかく送つてみると言ひ、すぐ載せてくれたのであつた。劉は、以後も冰心を激励し、他の新聞雑誌なども送つて読ませた。こうして冰心に、小説を次々と発表させたのである。劉はなかなか才能を見抜く鑑識眼のある人であつた。

(2) 「二日聽審的感想」

初めて新聞に掲載された文章というのが、民国八（一九一九）年八月二五日、女学生謝婉瑩投稿「二日聽審的感想」である（表参照）。今、この文章についてみてみよう。

先ず、この裁判についてであるが、これについては、小野信爾「劳工神聖の麵包——民国八年秋、北京の思想状況」⁽¹⁶⁾に詳しい。そこで、次のところを引用するにとどめよう。

これより先、七月二八日・二九日、魯士毅、易克疑、孟壽椿、劉仁静ら北京大学学生会幹事会の中心的活動家一人が逮捕・起訴せられた。七月一七日、北京大学内で安福派の走狗として糾弾された四人の学生・元学生が彼らに監禁傷害を受けたとして告訴したためである。北大学生幹事会が北京学生連合会幹事部を兼ねていたこともあって、学生運動への打撃は大きかった。

学生内部の分裂をはかろうとする陰謀の臭いのする事件の裁判を、宣伝部にいたせいであろうが、冰心は傍聴に行ったのである。

この文章で、冰心は初めに、代表の名義で傍聴したことを述べる。そして、裁判の様子はすでに詳しく紹介されているから述べないといい、原告たちの不安げな様子と被告としての学生会幹事たちへの激励の様子などを書く。帰宅すると張媽が出てきて、學生が喧嘩するのはよくある事だ。なぜ先生にまかせないで、裁判所なんぞに持ち出すのか」と言つたと述べ、その次にこういう。

私はそのとき本当に奇妙に思った。なぜこんな普通の田舎女がこのように理解できるのか、と。そして、ふと気がついた。彼女の理解が特に深いのではない。これは公道がおのずから人びとの心にあるということなのだ。それで、張媽^{チアム}のことが劉^{リウ}弁護士のことばと一致しているのだ。

冰心の最初の文章は、彼女の位置というものが傍聴者あるいは傍観者として設定されるものであった。これはきわめて象徴的である。そして、この文章は、理念としての正しさ（劉崇祐^{リウシュウ}弁護士の弁論）と生活実感（張媽という普通のお手伝いさんの感想）の接点に「公道」を認めるといふ構図になっているが、これはその後の冰心の姿勢そのものを象徴している。なお、「公道」というのは、正義、正しい道理のことである。それは人として当然踏むべき道なのであるが、そういう道をアプリアリに想定で

きることは、きわめて常識的な道徳観にもとづくからであろう。

(3) 母の立場

「斯人独憔悴」という短編小説は、五四運動を背景にしているが、運動を推進した若者の熱気と理念が描かれているわけではない。むしろ、闘争に敗れた者の打ちひしがれた気分と現状打破の策をみつけれないらだちが描かれている。この作品は、多くの批評家が言及するように⁽¹⁷⁾、対立する世代の若者側に立っての、革新的な意義を表現したものは思えない。それよりも、穎石らの挫折を甘く包む、センチメンタルな気分を我々に伝えるところに意味があるように思う。それは、前項でみたように、作者が事件の渦中から安全な場所にいる、傍聴者あるいは傍観者の立場に立って描いていることからくるようである。傍観者の立場に立つことは、処女作の「兩個家庭」でもそうであったといえるのだが、今、この二つの作品をくらべてみてみよう。

読んで先ず気つくことは、「兩個家庭」にくらべて、この「斯人独憔悴」は、格段にひきしまった文章で、構成もしっかりしており、スピーディな感じがすることである。それは何故かといえば、一つの理由として、作者の位置のことが考えられる。「兩個家庭」では、作者は「私」と同じになり、「私」を通じて見ることに徹していた。だから、どちらかといえば、判断を避けるようにしており、最終的な判断として「私」の母親が感想を述べるのであった。「斯人独憔悴」では、登場人物の誰か一人に視点を与えるのではない。作者は作品全体を構成する者として、客観的な位置に立とうとしている。この点が作品をなるべく作者自身から突き放して対象化し、そのことによりリアリティをもたせようとする努力になっている。

こうは言っても、現在からみれば不満が残ることは事実である。たとえば親子の対立の構図である。子の方は、兄と弟そして姉の三種に分けられる、かなり複雑な構図になるはずだが、実のところ兄弟と父との間には対応する会話も交渉もない。あるのは一方的な父の発言と父の決定にすぎず、作品に葛藤の高まりも深まりももたらさない。したがって、こういう点を批判することができよう。⁽¹⁸⁾

ただし、氷心にそういう葛藤を盛り上げる作品にしよとする意図があつたかどうかという点になると、大変疑問である。彼女の言によれば、彼女は作品をつくと、先ず母親楊福慈に読ませる。ときには父親謝葆璋も読んで意見を出したという。「斯人独憔悴」の登場人物である父の意見には、謝葆璋の意見がとりいれられているという⁽¹⁹⁾。いつてみれば、父母合作で作品をつくり、楽しんでるのである。こういう作り方は、文章を精練する大きな力となる⁽²⁰⁾。しかし、両親との合作ともいえる作品が、激烈な対立を意図する作品を産するとは思えない。作品のつくり方からして、根本的に異なるであろう。

ここでは二つのことを指摘しておこう。一つは、もう少し作品をみるならば、父も弟たちもその他の人物も、みな姉である穎貞の部屋に集まってくることに気づく。穎貞からじつと自分たちの行動が観察され、判断もされているのである。姉は、事態を傍からじつと見る者なのである。姉は、父からも信頼されているし、弟たちからも頼りにされている。ただし、中立ではなく、父の意見に合わせて父の信頼をえ、そうしておいて少しづつ実質的なことを取れば良いとする態度をとる。実にあいまいな態度といえる。だが、これこそ傍観者の態度であろう。現実を变革するには無力であるが、現実に対処する有力なひとつの方法であることを、この作品は提示しているかのようである。対立する双方から頼りにされるのは、そこにあいまいな部分があるからである。このあいまいな部分があるからこそ、家庭を家庭として成立させているのである。対立だけでは家庭など存立しえない。だから、このあいまいさをいい加減な図々しい立場とって批判しても仕方のないことなのである。こういうあいまいでいい加減な立場からじつと見ているというのは、これこそ母の立場なのである。だが、指摘すべき二番めのこととしては、この「斯人独憔悴」には、登場人物として母親が出てこないことである。作品の構図として、親子の対立はあるが、その子供たちのうちには穎銘、穎石の兄弟が入るだけで、姉の穎貞は母の役割となつてはみ出しているのである。姉は弟たちと共に反抗しないばかりか、父の位置に並ぶ妻でもない。父の言いなりになる妻の役割は、妾がもたされている。穎貞が完全に母ではなく、子供としての姉である理由は、力はないが新しさの味方であることを印象づけるためであろう。母親というものは、理念ではなく生理的に子供の立場を理解するものであろうが、ここでは、いくらかの理念をとり入れて、新しさの味方の立場に立っているのである。

この小説が醸し出すセンチメンタルな感情も、こういうところから産み出されている。父と子の対立があるには違いないが、それよりもむしろ徹底できず、あまい部分に浸ってしまった挫折感を、温かく包もうとしているのである。挫折感が問題なのではなく、それを温かく包もうとするからこそ、この作品が世に受け入れられたのである。新しい社会変革の思いが妨害にあつて、形として定着しないいらだたしさを、同情の立場から汲みとつてやろうとする、そういう社会的雰囲気がこの小説には表現されているからである。

3 生存感

(1) 『晨报』の一週年記念増刊号

民国八(一九一九)年十二月二日、『晨报』は、紙名を『晨鐘報』より変更して一週年になった。その記念として、「記念増刊」を出した。その第三附録⁽²¹⁾には文芸が掲載されたが、その中に冰心女士の名がある。

この増刊を少し仔細にみてみよう。まず、「文芸」欄として、胡適「週歳」が載る。次に、冰心女士「晨报……学生……労働者」、魯迅「一件小事」、起明訳(俄人庫普林作)⁽²²⁾「聖処女的花園」⁽²⁴⁾の四篇が掲載されている。紙面中段のまん中に、羅素(バーランド・ラッセル)の顔写真と四行たらずの紹介文⁽²⁵⁾が載っている。次は「筆記」欄で、淵泉⁽²⁶⁾の「膠済沿路一瞥記」(一)青島概説、が膠州湾の地図とともに掲載されている。以下裏面(第十頁以下)については省略する。

以上の顔ぶれは、さすがに『晨报』だけあつて大したものである。胡適が新文学運動の指導者とみなされており、また北京大学教授でもあつたから、巻頭の位置を与えられているのは当然のことといえよう。当時胡適は二八歳であつた。だが、当時一九歳の小娘冰心が、魯迅をさしおいて二番めに位置するのは、私にとっては大きな驚きであつた。たとえ私的感想は別にしても、冰心自身にとつても晴れがましいことであるに違いない。⁽²⁷⁾

しかし、冰心のことをよくみれば(表参照)、十二月一日までに、冰心は『晨报』に四篇の小説と三篇の文章を発表していた

のである。しかもそれらはどれも、社会的関心にマッチし、読者からそれぞれに反応があったもので、作品についての感想を述べた読者の投稿も掲載されたことがあるのである。⁽²⁸⁾ 冰心は、この時点ではもう、単に女性という興味だけでなく、実力を備えた並々ならぬ人物になっていたのである。

念のために付言すれば、魯迅もすでに著名な新文学の作家になっていた。三八歳である。起明すなわち周作人も北京大学教授であり、新文学運動の指導者として第一級の人物であった。三四歳。魯迅の「一件小事」についていえば、老婆をケガさせた人力車夫が、「私」の放っておけということばを無視して、助けおこして派出所へ行く。そのとき人力車夫の後姿がますます大きくなり、「私」は自からの卑小さを感じるのであるが、ここに、少しづつ動き出してきた労働運動に対する、魯迅の「ぼんやりとした不安」⁽²⁹⁾ をみてとることができよう。それは、すでに中年に到した魯迅の社会を見る目の成熟ばかりでなく、「五四運動」後の社会動向に対する洞察の深さなのであろう。したがって、暗いといえば言いすぎになるが、単純ではない、屈折したものを感ずるのである。⁽³⁰⁾ これに対して、胡適の「週歲」は、押韻した新詩の形式で、「你」すなわち『晨报』がこの一年間奮闘したことを称え、これからもいつそう奮闘しないと「病魔」に負けることになるぞという。一周年の御祝儀の文章としてふさわしいといえるが、単純で軽いものともいえよう。

冰心の「晨报……学生……労働者」では、朝、街を行くのはみな通学の「学生」と労働する「工人」であって、「老爺先生們（旦那様や先生がた）」がまだ眠っているのとは違々と対比する。そして、学生と労働者は、今日の国家と世界の主人公で、進化する潮流の中心だという。ここには、学生⇨知識に対する信頼がある。そして、世界の潮流の進歩から労働者を視野に入れねばならないとする観念が先行している。労働する「工人」とはいうものの、それが具体的にどういう人たちをイメージしていたのかは不明である。だからごく自然に、学生が労働者の上に位置するのである。

しかし、ここで冰心の論の稚拙を指摘しようというわけではない。むしろ、こういう単純で底抜けに明るい文章こそ、当時の社会的関心、雰囲気を伝えているのではないか。この若々しい明るさは、冰心の自然年齢によるばかりでなく、時代的なもので

あつた。⁽³¹⁾ 上述した魯迅の「一件小事」でも、魯迅であるからこそ、それほど明るくはなく、「子曰く詩云ふ」を学んだ知識人の「卑小」を描いたが、それでも、魯迅が「私の希望と勇気を大きくさせる」と最後に書いたように、全体に漂うのは進歩への信頼であつた。

(2) 「超人」

氷心が作家として名声を確立したのは、「超人」という短編小説が『小説月報』⁽³²⁾に発表されてからのことである。

「超人」のあらずじ。主人公何彬は、一切を否定しようとする冷たい心の持ち主である。世の中は虚無だ。人生は意義がない。人は演劇をしているようなもので、舞台上に上れば父や子だが、終わればばらばらで泣くも笑うもその場限りだ。ニーチェも言うように、愛と同情はどちらも悪だ、といった考えで生活している。ある夜、禄児という十二歳の、走り使いをしている子供が足をケガする。何彬は、その痛がる呻吟の声で不眠になり、禄児の治療代を与える。数日後、呻吟の声はやむ。禄児が礼に来るが、何彬は返事もしない。ある日、何彬の転勤が決まつた。その晩、何彬は母親に抱かれている夢を見る。ふと気がつくと、禄児が置いていった花籠と手紙があつて、その最後にこう書いてあつた。「僕にはお母さんがいます。お母さんは僕を可愛がついていますから、おじさんに変感謝しています。おじさんにもお母さんがいることでしょう。おじさんのお母さんもきっとおじさんを可愛がつていることでしょう。そうすると、僕のお母さんとおじさんのお母さんは仲の良い友達になれます。ですから、おじさんはきっと、おじさんのお母さんの友達の子供からの贈り物を受け取って下さるに違いありません」。この手紙を読んで涙した何彬は、次のような置き手紙を書いて、出て行く。「君が無邪気な心で指摘してくれたことには、私はもう一度深く感謝しよう。小さな友よ、確かにこの世の母親と母親はみな良い友達です。この世の子供と子供もみな良い友達です。どちらもお互いに結ばれていて、見棄てられるものではありません。(略) 私は罪を一杯犯し、手に何もない男なので、君にお返しするものがあります。——今、私にあるものといえば、罪を悔いる涙の光と三日月の光ときらめく星の光だけです。この世ではこの三つだけが

純潔で、無垢なものです。私は涙の珠を一すじの柔い糸で貫き、それを三日月の両端にかけ、また空一面の星を摘んできては、三日月の円い凹みに盛ることにしよう。これだって黄金色した花籠ではないか。その香りは、罪を悔いる者の祈りだ。どうか君を受けとって下さい。この花籠こそ君へのお返しとしてふさわしいのだから”

この短編小説「超人」は、発表されたとき、冬芬（茅盾）が“何彬の手紙を読んで誰が泣かずにいられよう”と書きつけたように、当時の人に強い印象を与えた。⁽³³⁾たとえば、潘垂統は、“超人は我々青年を救う上帝なのだ”⁽³⁴⁾といっている。直民（沈沢民⁽³⁵⁾）や劍三（王統照⁽³⁶⁾）などは、心冷たき人間が母の愛という無償の大いさと連帯によって、人間性をとりもどしたことを評価する。それは、当時の悩める青年たちへの一つの指針をあたえたのだという。もつとも、佩衡（閔佛九⁽³⁷⁾）などのように、ニーチェの超人からのことばの引用が間違っていると指摘するなど、超人の概念に疑問を提する人もいた。また、構成がまずい、現実味が無い、こんな手紙を十二歳のろくに学校に通ったことのない子供が書けるわけがない、といった批判はあるにはあった。しかし、この作品が青年の心をとらえたことも事実であった。巴金は、「超人」の中の子供が自分の母を愛することが、我々をして我々の母親を愛させることになったことを覚えている、と二十年ほど後に書いている。そして、私のような孤独で寂しい子供に、生活の勇気を与えてくれたのだとも書いている。⁽³⁸⁾

その理由の一半は、やはり「超人」が文学作品として存在したからである。文章のもつ詩的イメージが読者に伝わったからである。時代の諸矛盾をリアルに提出することによって人々に印象づけたのではない。ストレートにことを読者に伝えようと、葉聖陶⁽³⁹⁾などの新文学の作者が努力していた時期に、冰心は往々にして神秘的幻想的な描写をとりいれる。先に引用した、何彬の別れの置き手紙などもそうである。三日月に満天の星を摘みとって一カゴの花籠とする。その香りは罪人の祈りだ、などという美しいイメージを、当時の新文学者の中で誰が描きえたらうか。⁽⁴⁰⁾ここには、生活の次元を一時離れ、宇宙空間に生命を漂わせたような生存感が感じられよう。ひとは、どんなに忙しくても、夕陽の美しさに感動し、時間の推移にハッとさせられることがある。また、中天の青き月に引き込まれるような思いにとらわれ、宇宙と自己が一体化した感じを持つこともある。そういう自然の一

瞬に赤裸な自己の姿を感じるもの、を生存感というならば、そういう人間の生存感を伝達するものとして小説はあるのだということ、を、氷心の作品は教えている。

子供には母がいて、その母と母とは連帯できるなどという単純な論理を、当時の青年がストレートにそのまま信じていたわけではないはずだ。それでも多くの者が「超人」に涙し、感銘を受け、記憶しているということこそ小説の強さなのであろう。氷心の「超人」は、青年たちに明確で正しい指針を与えたというより、むしろ青年たちに涙を流させ、共感を与えたのである。これが文学というものである。青年たちの共感を呼んだ作品としては、郭沫若の詩集『女神』⁽⁴¹⁾や郁達夫の小説『沈淪』⁽⁴²⁾があるが、氷心の「超人」はそれらより、ほぼ六ヶ月ほど早い。小説が文学作品として定着したのには、郭沫若や郁達夫それに魯迅の作品が力あったが、氷心の作品もそういう時代としての一九二〇年代の幕開けを告げるものであったといっている。繰り返せば、氷心が青年たちに定着したのは、この衝撃などではなく、ものの共感であった。だが、そういうものは、論理的に分析した批評から落ちてしまう面をもっているのかもしれない。次に述べる成仿吾の評論などを読むと、そう感ぜざるをえない。

成仿吾は、『創造季刊』において、ただちに「超人」について論じた⁽⁴³⁾。彼は氷心の「詩人としての天分」豊富な想像力と真挚な心情⁽⁴⁴⁾を認めながら、他の人とは違って、⁽⁴⁵⁾「超人」は成功した作品とはいえない、という。そして先ず、単なる印象批評をやっているのは困るといい、芸術(Art)と効能(Efficacy)を批評のときは便宜的に分けておこなうべきだという。こういう観点からみると、「超人」がいかに小説として構成上破たんしているかわかるとし、この小説にあるのはSentimentalにすぎないと論ずる。そもそも愛とは取る(to take)のではなく、与える(to give)ものなのに、何彬は何も与えていない。何彬は愛のない男にすぎない。近代人の精神上的の苦痛は、一切を否定するところになどはなく、肯定も否定もできないZero Pointに立たされていることにあるのだ、と論じている。彼は、作品の抽象的記述が欠点になっているといい、作品の戯劇的効能は動作(Action)が重要で、抽象的記述を動作に投射(Project)せよと論を結ぶ⁽⁴⁶⁾。

確かに成仿吾の論は、『小説月報』に載った、他の評論にくらべて論理的である。用語の使用も恣意的ではない上、横文字が

それぞれについて、読者の知性をひきつけるようだ。他方、効能なり動作なりのことばで、文学によりストレートに事象に対応することを求める論となっている。文学を対症療法的な道具にしようとする動きは早くからあり、⁽⁴⁶⁾ 徐々に顕著になって、この成仿吾の論のように精密化していくのであった。時代の潮流は、知識人それぞれが、より論理的に整備しなければならぬほど厳しくなってきたのだといえよう。彼の「評冰心的『超人』」は、まさにそのことを示すメルクマールであった、といっている。この論文には小説に意義と効用を求める側からのいらだちが表現されている。「超人」という小説の論理は稚拙である。というよりも破たんさえしている。それにもかかわらず青年に涙を流させる。この不思議さのために、彼は精緻に論証し、けんめいに叫ぶ。「超人」が青年の心をとらえていた時代は終わったのである、と。

それにもかかわらず、文学作品として、あるいは文学史の問題として、冰心の「超人」は残るであろう。作品の表面にあったことが、時代とずれてきて過去のものとなっても、作品が伝えていたものを読者が感じるからである。今、そのものを生存感と呼んでみたが、それはことをどう組み立てれば表現できるのか、わからない。偶然ともいえるべき瞬間の亀裂から、ものが直接伝わるのである。それが文学というものに違いない。成仿吾もそれを感じていたからこそ、いらだったのである。

ともあれ冰心は、一九二三年八月一七日、上海から郵便船ジャクソン（約克遜）号に乗って、アメリカへの留学へ旅立った。許地山⁽⁴⁷⁾や梁実秋⁽⁴⁸⁾といった七十余名の中国人留学生と一緒にであった。この留学生の中には、清華大学から社会学を学びに留学するのちに夫となる呉文藻⁽⁴⁹⁾もいたのであった。⁽⁵⁰⁾

三 冰心の文学性

1 平凡な人生

(1) 「寄小読者」通信二

冰心の「愛の哲学」についての解説は、すでに第一章に引用した、それぞれの論者が言及していることであり、そうした文章によつて概略をみたといえよう。⁽¹⁾ また「母の愛」というものが、伝統的な倫理道徳ではないという李沢厚の指摘もみた。⁽²⁾

小さなお友だちよ、天が人間を生じたのには、分けへだてがあつたでしょうか。貧富もなく、貴賤もないのです。神様は一人の母親を用意して、愛するようにさせたのです。また、天地開闢の混沌とした状態から脱したばかりに、どうして貧富貴賤といった人為的な制度や階級があつたでしょうか。当時の人類は母の愛の光のもとで、それぞれが自由で、ひとりひとりが平等であつたのです。⁽³⁾

冰心はアメリカに留学し二ヶ月ほど病いに倒れ入院した。病床での孤独と郷愁とが母への思慕をつのらせ、母の愛を信仰のごとく高く持ち上げることになつた。それは、次のような屈折した心境より成り立っている。

みなさまにもこんな覚えがおありですかしら——私は時々、いろんなものがお母様より大切になつてしまふことがあります、兄弟やお友だちの為に、花や鳥や虫けらやお魚の為に、いえ、本一冊衣服一枚の為に、お母様にさからふ様なことがあります。その時は、ただあまえたかつただけで、お母様だつて一寸も気にかけていらつしやらないに違ひありません。けれど、今かうして病気で寝ながら、一つ一つ想ひだして見ますと、身ぶるひするほど後悔します。みなさま、私の過失をよく見てください。そして、これからみんな注意しませうね。本当にあなたを愛するのはお母様だけです。お母様のお叱りになる

ことは、一つ一つ素晴しく大きな訳があるのです。花や鳥、虫や魚などを愛するのは、ほんの暫くのことです。お母様の愛は永久に続くのです。⁽⁴⁾

母の愛が全面的に自分にふり注いでいるにもかかわらず、自分の方は他のことに気をとられたり、ときには反抗したりしたことがあった。今、病気をしてはじめて後悔の念がおきた。この後悔の念が母の愛を高く持ち上げているのである。他のことに気をとられたり、反抗したりしたことについて、氷心はアメリカへ出発する前、一つのエピソードを書き残している。

小さいお友だちのみなさま——

私は二番めのお便りで、早速みなさまに悲しい事件をおしらせ申しあげるのは、本当に申訳のないことでございます。⁽⁵⁾

これは、「寄小読者」の通信二の出だしである。「寄小読者」というのは、一三年七月二四日から始まった、『晨报副鐫』の「児童世界」欄への手紙のことで、その第二通め、七月二八日付（掲載は八月二日）にあたる。この時、氷心はまだ北京に居た。ここにいう「悲しい事件」とは、去年の春におこったことである。夜の九時すぎ、「私」が父母と一緒に読書していると、小さな鼠が出てきた。思わず鼠に本をかぶせたが鼠はじっとして逃げない。虎公という名の小犬が走り込んできたので、父母が早く逃がしてやりなさいと叫ぶ。私は本をやっとどけたのだが、鼠はやはり動こうとしなかった。小犬に食べられてしまったという「事件」である。

私が呼びとめるのも聞かずに、鼠を口にくはへて、さっさと戸口から抜け出てしまいました。表へ出てみると、鼠は虎公の口の中で、四五遍かすかに呻いたきり、物音もしなくなりました。⁽⁶⁾（略）

私はあわてて、アーと溜息をつきました。お母様は手に持ったをられた御本をそっと下へ置き、私の顔を見あげて、「本当に小さいのね、まるで玩具^{おもちゃ}みたいだもの、でなきあ、きつと逃げたのね。生れて初めて餌^{えさ}を探しに出てきたんだらうに、到頭帰られなくなつて、お母様鼠は巢の中でどんなに待ってゐるか知ら——」とおっしゃいました。

小さいみなさま、私は墮落しました、確に墮落です。私もしみなさまぐらゐの年頃にこんな言葉を聞いたら、きつとよろ

よるとよろけたと思ふと、いきなりお母様の胸にかきついて、ワーッと泣いたことでせう。それなのに、私はあの時——みなさま済みません——私は気にも止めない様な顔をして、にっこり笑ったのです。

氷心の記述はさらに続き、この後ひとり寝室へ行くが寝ることもできず、しばし部屋の中を歩きまわったあげく、枕の上につつ伏して涙を流したことを述べる。

“私”の行為が小さな生命を失ってしまうことになった。さらに、そのことの重大さを指摘する母のことばを受けいれず、にっこり笑った。これは“墮落”というよりも、反抗であろう。

だから、氷心のことばにもかかわらず、この文章には何かウキウキしたものが感ぜられる。あたかもわざと鼠を犬に食わせ、ガリガリと犬が嘔み、チュートチュートと鳴く小鼠の悲鳴を、恐わがりふるえながらも、けっこう喜んで見つめているようなそんな感じがする。ここにみられるのは、残酷さの快感とでもいえよう。生命のもつおのずからなる残酷さが、ここに垣間見えている。氷心はわざわざ部屋から出て行って、鼠が犬に食べられるのを見たのである。そのうえ母のことばに彼女は“にっこり笑つ”て、反抗したのである。このとき体感したのも、鼠の悲鳴を聞いたときに感じたものと共通するものであったに違いない。彼女自身、生命のもつ残酷さに触れたのである。だから眠れなかったのである。それは、母の“胸にかきついて泣く”ことと対立するものである。いつまでも母の胸にすがりついて泣いていた方がどんなに楽で平静でいられたかしのれない。しかし、いずれは生命のもつ残酷さ、それを生存意識というならば、みずからの生存意識を帯びて生きていくのである。これが成長というものであり、大人になるということである。

こういう生存意識を知った氷心が、以後も“母の愛”を強調しくり返す。それはこの文を読む対象が子供であったからである。しかし、段々に力がなくなっているような気がする。先に引用した、通信一二、にも、“これからみんなで注意しませうね。本当にあなたを愛するのはお母様だけです。お母様のお叱りになることは、一つ一つ素晴しく大きな訳があるのです”ということばも、ほんの暫くであれ、母親以外に愛の対象を知った者には、あまり説得力をもつとは思えない。そして、“お母様の愛は

永久に続くのです」とか、同じ通信一二にあることばで、李沢厚も引用していた、「人類は母の光のもとで、それぞれが自由で、ひとりひとりが平等」だということばは、むしろ「母の愛」を氷心が自分に再確認する祈りのことばのように聞こえる。「母の愛」は、内心に湧き起こってくる、生命のいかんともしがたい成長の動きを、必死でつなぎとめる呪文のようになっていく。

氷心が病床にあつて知つたのは、無私ゆえに大きな母の愛は、現実には効力を持たぬ理念としての愛であるということだった。「母の愛」を感じるのは、だから、母ではなく、子供の心の問題であつた。子供は病床にあるばかりでないから、暫くであれ、いろいろな愛の対象に関心を寄せ、目の前の愛に引き寄せられ、「母の愛」などつい忘れてしまう。これは健全な成長であるが、病床にある氷心から見れば、恐ろしい事実である。氷心には母と子の双方のことがわかり、わかりすぎるからこそ、ただおののき、祈るばかりなのである。「母の愛」の強調くり返しは、このおののきを鎮める呪文であつたといえよう。⁽⁸⁾

(2) 「南 帰」

氷心は一九二六年六月、威爾斯利(Wellesley)大学の修士号を得て帰国する。二九年六月、呉文藻と結婚した。その年の十二月、母の病気が篤いと知らせて、上海の母のもとへ駆けつける。この半月あまりの様子の一部始終を書いたのが、『南帰』であり、日本では、川副照夫が全訳を発表している。⁽⁹⁾母の楊福慈は日に日に衰え、いろいろな病気を併発した。そこで母の苦痛をやわらげるため、麻酔性の劇薬をのませざるをえなくなつた。

一月五日の夜のこと、父は病人の枕許に座つておりました。私は疲れ切つて父のベットを借りて横になり、うつらうつらしていましたが、突然母の呻き声にびっくりして眼を覚ましました。何だか母と父とが大きな声で言い争っているようです。私は急いで起き上りました。その時母の声が聞えて来ました。「どうぞ助けると思つて睡眠剤をお渡し下さい。もうこれ以上我慢が出来ませんから」母は素晴らしいながら、顔を赤くし、息づかいかもせわしげに、もだえ苦しんでいるのです。私は母の苦しみがもう頂点に達しているのだと感じ取りました。母はずっと前、私にこんなことをいったことがありました。

それは骨を病まれた頃、ご自分で睡眠剤の名を紙に書いて袋の中に入れておき、痛みがひどい時に、こっそり誰かに買わせて、それをそっくり飲んでこの世を去ろうとお考えになったということです。——この時、私はあわてて母の前に飛んで行き、あらん限りの言葉でおいさめし、さらに哀願したのですが、母は頭を振って私に取りあわず、ただじーと父を見つめているだけなのです。父は暫くほんやり佇んでいたのち、身を翻がえして薬瓶を取り、二粒薬を取り出して、母の口に入れてやりました。母は続けざまに強く首を振って、つく息も苦しげにおっしやるのです。

「あなたも本当に……、これからもうお会い出来ないというわけでもありませんのに……」

この言葉はまるで刺激剤のようでした。ひたいにさつと皺をきざんだ痛たましくも厳肅な父の面持、私はただふるえるばかりでした。父は思い切った様子で振り向くと、また幾粒かの薬を母の口に入れてやりました。私はびっくりして、飛ぶように走り寄り、父の腕にすがりついたのですが、もう遅く、母は早くも薬を呑みこんで、口を閉じ、頭をたれて眼をつぶり、眠りに落ち入らんとしているかのようでした。父は力なく腰を下すと、顔を母の肩先によせて、はらはらと涙を流しているのです。私はベッドのそばにひざまずいたまま、声もなく、ただしっかりと父の手を握って、母の寝顔を見守りました。⁽¹⁰⁾

長い引用になったが、ここに描かれているのは、少くとも母と子の愛ではない。夫と妻の愛というよりも、すさまじい人間の生存の残酷さが描かれているといった方がいいであろう。〃頭を振って私に取りあわず、ただじーと父をみつめているだけ〃と冰心に描写された母は、このとき母ではなく、ひとりの人間であった。子供が見たのは、死に直面した際の、ひとりの人間の赤裸な姿で、母や妻といった関係を越えてあらがう人間の姿であった。この傷まじさが人間の在り方を考えさせる。冰心の〃母の愛〃は、外被をとって人間存在の生存感そのものへと転換せざるをえなくなるであろう。

『南帰』という、自分の母の死のために半月ほど北京より南の上海へ帰ったことを記述した散文が、すべて身内の人物による〃母〃への思い入れで書かれているにもかかわらず、広がりや深まりを感じさせるのは、人間の生存感が確実に把握されているからである。同時に、人はどんなに愛し慈しんでいても、母であれ、妻であれ、死の前ではそれぞれ孤立しており、他者は傍観

者でしかない。この事実の厳肅さを認めるところに抒情が醸し出されているのである。

(3) 「相 片」

冰心は、母の愛について言及することが少なくなる。多くの評論家からの批判を受け入れたからでもあるまい。また、時代が労働運動や日本の侵略戦争、内戦といったあらゆる時代になったからというわけでもあるまい。あるいはまた、自分が三年に長男宗生を生み、母になったからというわけでもあるまい。母の愛についての言及が冰心において少なくなる最大の理由は、人間は死の前では孤立するという事実を知ったからである。このことを前項においてみたのである。だから解放後、

私は過去間違つて天下の母親はみな天下の子供を愛するものだと思っていました。そうではなかったのです。愛は階級性があるものなのです。あるとき私は、自分の子供を愛する母親が、ひとりの手伝いの少女をひどく殴るのを見ました。こうしてわかつたのです。愛は階級性があるものだ、と。⁽¹¹⁾

と言っているが、その程度ですます質のものではなかったはずだ。

冰心は三四年に「相片」⁽¹²⁾という短編小説を発表している。これは、昭和一五年実藤恵秀によって「写真」として訳出されている。⁽¹³⁾

あらずじは、こうである。

C女士がアメリカから中国へ来て二十八年になる。二十五歳のときは、学生の愛慕と崇拜の的になり、B牧師との仲をささやかれるほどであった。だがその後、B牧師は若い活潑なアメリカ女と結婚した。C女士は十年前、王氏の遺児淑貞を引き取り、わが子同様可愛がった。彼女は休暇でアメリカに帰るとき、女学校を卒業したばかりの十八歳の淑貞を連れて行った。淑貞はアメリカの若者になじまなかったが、李牧師の息子天賜とはうまい、だんだん活潑になってきた。ある日、淑貞はC女士にピクニックに行ったときの天賜が撮った写真を見せた。

C女子はけだるそうに写真をとりあげて見ると、みんなで八枚あって、ジャック夫人母子のもあり、李牧師父子のもあり、淑貞が彼等と一緒にとったのもあり、また青年団が多勢でとったのもあったが、最後の一枚まで来てC女士はたちまち呆然とした！ 背景は一本の大きな橡の木で、年老いた幹には緑の若芽がこまごまと綴られ、その下は草原。そこに淑貞がうつむいて弁当の蓋をあげようとして袖をまくりあげ、ふと頭をもたげたところ、顔中がなまめかしく笑っているが、それは驚喜の笑いであり、情熱の笑いでもある。流動するようなまなざし、雪のように白い歯なみ。こうした笑いの姿こそC女士が十年来絶対に見たことのないものであった！

ふと軽微なふるえが来て、C女士の心にはたちまち名状しがたい熱烈な感動が湧いた、いぶかりでもなく、いきどおりでもなく、悲しみでもない——彼女はシッカとその写真をにぎりしめた——

もともとこの前のピクニックの日には、自分が病気だったので、淑貞にゆかせず、家でそばについてもらおうと思っていた。でもまた自分からみんなの楽しみを打ちこわしてもと思ひ、たぶん淑貞だつて行くまいと豫想したので、人前ではちよつと遠慮してみたのであるが、思いきや彼女はちよつとためらっただけで、帽子をもつて門口に立っている李天賜の方をちよつと見ると、うれしそうに声をあげてみんなの後について行ってしまったのだ——

彼女はボンヤリとこの写真をながめていたが、写真の淑貞は見えずに、そこにはB牧師の情をふくんだ口辺、王先生の憂鬱な顔、古い都、城壁、小さい庭、バラのたななどが重なりあつて浮きあがつてきた——指の力がゆるんで写真がすべり落ちる。C女士の目はたちまち涙で一杯になった。⁽¹⁴⁾

以上は、「写真」の最後に近い場面の引用である。小説は、C女士が「淑貞や、わたし中国に帰りたいたいと思っているの（孩子、我想到中国去。）」と云うことばで終わっている。

ここにはみごとに、過ぎ去る者と来たり花開く者との避けられぬ交叉が描かれている。その交叉を通じて、ひとは人生を感じるのである。ひとは、人生など感じたくないものだ。だが、親子なればこそ、有無を言わず、事実をつきつけてくる。親は

子を通じて、そして子は親によつて、こうして有限なる自己存在を確認させられるのである。この人間存在の生存感を前にして、ひとは呆然自失するほかない。これまで氷心が多用していた「惆悵」や「寂寞」などのことば⁽¹⁵⁾によるのではなく、ここでは、喜怒哀楽の基礎となる残酷な事実が見すえられている。確かにひとは自分一人で死ぬのである。

人生を会得するということは、たやすいことでしょうか？ 私はこれまでに、さまざまの無知、愚昧、そして傲慢な言葉を使って来ました。「私は人生の凡ゆる風情を味わつてみたい。人生の風情はことごとく経験してみたい。」私はこのように言つたことがありますし、また、「人生を会得するには、たとへば針の敷物の上を転がるように、血と肉の体をそのままぶつつけて、血を流してみることだ。」とも言つたし或いはまた、「悲喜哀楽はその極に達するのだから、生命の神秘も偉大さも見出せない。」とも言いました。だが、その「神秘」とか、「偉大」とかいうのは、いづれも未経験者が、理想としてあがれた言葉であるか、或いは体験者の自欺、自嘲的な言葉でしかありません。私はむしろ無神経で、愚かな、つまらないりきたりの人間として、一生を安楽と卑怯と、依頼の環境の中で過したいと思ひます。私には神秘というものを知りたくもありませんし、偉大さを求める必要も感じません。

さうは言うもの、おおいかぶさってくる人生そのものは、ちょうど暴風や驟雨に襲われたときのように、ただちぢこまつて、ふるえているより外どうしようのないものです。⁽¹⁶⁾

氷心が描いたのは、実に平凡な人生であつたといつてよい。おおいかぶさってくる人生の前では、偉大とか平凡とかいうことは、どうでもいいことだ。生きていけるうで感じる種々の生存感を、氷心は母の愛だの人類の愛だのということばで、我々に伝達したのである。

ただし、このことは当時においては理解されなかつた。

結局、彼女の宇宙と人生に対する認識は、ただ神秘的、個人主義的、唯心的、幻想的でとらえどころのないものにすぎない。他の知識分子と同様、神経衰弱な過去の詩人の病態を極端に表現し、病的な空想を用いて世界のかなたの「知識分子の宇宙

主義なるものに憧がれているのである。⁽¹⁷⁾

そして、次のようにも言われる。

彼女の作品にくりひろげられた世界から見れば、彼女は社会に対してただ遠くから見るだけであり、人類に対してはけつして深く接近しないし、一切の社会的問題に対して深刻な探索をしなかった。彼女はただ自分の世界の中で、唯心的に一切を論断する。

彼女は一人のブルジョア階級の唯心論者にすぎない。

彼女は社会の一切と隔絶し、彼女が理解しうるものは、ただ次のものだけなのだ――

A 母親の愛

B 偉大な海

C 童年の回憶。⁽¹⁸⁾

2 おわりに――大海

冰心について、まだ論ずべきことは多い。たとえば、母の愛が冰心において常に注目されているが、伝記的には父への愛も重視すべきであろう。初期には、初期というのは、たとえば『繁星』⁽¹⁹⁾に顕著で、『春水』⁽²⁰⁾にはもう一つも出現しないという意味なので、本当に早い時期のことをいうのだが、冰心は父への呼びかけで始まる小詩を作っている。⁽²¹⁾父への愛も強かったのである。だが、作品の表面からは、父への愛は母の愛にとって代わられ、みられなくなる。

また、その初期の父への愛は、海のイメージとつながっている。父謝葆璋が海軍の軍人であったからであるが、もちろんそれは契機であって、冰心は以後、海を好み慕い、海に傾倒していく。⁽²²⁾

では、海のイメージとしてどのようなことを描いていたのか、冰心にとって海とは何であるのか、などの問題が残ることにな

る。

ここではごく簡単に、その海について触れておこう。

すでに李沢厚が第一章第四節で引用していたように、「春水」一〇五の小詩では、海は懐に私を抱いた母を乗せた小舟を浮かせるものであった。

ここからも容易にわかるように、海は我々の生を浮かせる時間のメタフォアである。もっと直截に、次のようにもうたう。

私の心は

孤舟のように

起伏常なき時間の海をつき進む⁽²³⁾

氷心において注意すべきは、子供の頃から彼女は海を見ており、海に何かを感じていたことである。

晩御飯のときのことです。灯光あかりのもとで、母は私をしばらく見つめていましたが、ふと思いついて笑いをしながら、こう言いました、「昔ね、海辺に住んでいたときのことですよ、私はつらくてたまらず、午後ひとねむりしました。目をさましてみたら、どこにもお前がいなかったのです。」

私は、母が何のことを言おうとしているかわかった——ただ何も言わず、五歳のときのことを思い出していた。

弟たちは聞いた、「それから」

母は笑いながら、私を見て言った、「門のところに居ましたよ。この子はじいっとひとりで石段に座って、海を見ていました。私は三時まで眠ってしまいましたから、この子も三時まで座っていたのよ。可哀そうなひとりぼっちの子。ほらね、この子は小さいときから、もうこんなにおとなしかった⁽²⁴⁾——私は急いで駆け寄ると、大切に懐に抱きしめてやりました……」

母の目には、喜びと慈しみの涙が一杯だった。

父も微笑んだ。——弟たちは、なおさら私を見て笑った。

母の愛、ひとりぼっちの悲しみ、そして海の深遠、それらが私の心の中に言い表わせない惆悵を、またしても引き起こした。⁽²⁵⁾

これは、冰心が二二年七月に書いた、「往事」一〇の全文である。ここでは、冰心が三時間もひとり座りっぱなしで海を見ていたことが、母の口から語られている。冰心には小さなときから、ひとり座って沈思する習慣があった。このことは、茅盾も注目し、第一章第二節に引いた「冰心論」の中でこの文章の一部を引用しているくらいである。⁽²⁶⁾

冰心が海を小さい頃から好んで見ていたことは、その後の彼女の作品に海の描写をちりばめることになる。海の描写は、彼女の作品の特色の一つとなっており、多くの論者が指摘することで、前項においても錢杏邨のことは引用したところである。第一章第三節で触れた賀玉波も、ここに引用した「往事」一〇の後半部を引用して、「母の愛の推賞と自然の讚美」⁽²⁷⁾が冰心作品の特色だと言っていた。また、同じ第一章第三節で引用した陣ノ内宜男の文も、冰心の海の描写が優れていることを指摘していたのである。

だが、海のさまざまな描写もさることながら、むしろ冰心は、海に「言い表わせない」何かを感じとっていたのではなからうか。寄せては返す、永久に続くかと思えるそのたゆまぬ動きに、もしかすると「起伏常なき時間」⁽²⁸⁾を感じていたのかもしれない。あるいは、海によって返照される人間の生存感を感じとっていたのかもしれない。

冰心は、早くから多くの論者によって批判されてきた。甚しくは次のように言われたこともある。

もう結構だ！空虚な博愛に何の益があるというのか。どうかあなたは、現社会の組織を少しでいいから研究して下さい。⁽²⁹⁾

冰心は冰心なりに成長したように思える。それは確かに、だんだんと時代の要請にマッチしたものでなくなつたようである。その点、彼女がもっていたジャーナリティックなセンスは有効に働かなかつたのかもしれない。しかし、アメリカ留学と療養そして母の死は、彼女に深まりを与え、単なる傍観者から人生を見つめる者へと変貌させたといえよう。唯心論者だ、ブルジョア階級にすぎぬ云々と批判されても動ぜぬものを、彼女は心底に持っていたのであろうが、それは小さなとき何時間も見つめてい

た『大海』であつたに違いない。⁽³⁰⁾

〔付記〕

拙文は、一九九〇年十月一三日、大阪経済大学で行なわれた現代中国学会第四〇回全国学術大会で、「謝冰心について——その初期活動」と題して報告した内容に手を加えたものである。

注

第一章

- (1) 阿英「謝冰心」『夜航集』上海良友圖書印刷公司、一九三五年三月。阿英のこの文章は、「小品文談」一四編として、「小品文談」と「俞平伯」「朱自清」など三人の作家について論じたものの一つである。一九三三年に書かれた。今、「阿英文集」上、生活読書新知三聯書店香港分店、一九七九年六月、でも見られるが、周作人、鍾敬文、蘇綠漪、徐志摩の四人がぬけている。
- 引用文中の「当時」というのが、一九二〇年代前半を指すことは、阿英が列挙した作品の発表時からして間違ひはない。注(3)―注(12)を参照。
- なお、阿英の原名は錢德富。二〇年代には錢杏邨や黄英などのペンネームで、詩や評論を発表した。安徽省蕪湖市の人。文芸評論家、戯曲家、文学史家。一九〇〇―七七。
- (2) 一九三〇年代、林語堂(一八九五―一九七六)が提唱し推進した散文。五四以来の白話文に文語文がもつていた緊密性をとりいれて精錬し、内容に作者の個性を濃厚に表現することをめざした散文をいう。
- (3) 一九二一年二月三日執筆。『晨报副鐫』二二年一月一日掲載。『冰心文集』3、上海文艺出版社、八四年一〇月所収。
- (4) 一九二二年二月五日執筆の「十字架的園里」のことと思われる。『晨报副鐫』二二年三月三日掲載。『冰心文集』3所収。円括弧は、阿英の原注(以下同じ)。なお、『晨报』文芸欄が、副刊『晨报副鐫』に変わったのは、一九二二年一月二日からのことである。
- (5) 『小説月報』二二卷一号、一九二二年一月一日掲載。『冰心文集』3所収。
- (6) 小説、散文集。商務印書館、一九三三年五月出版。
- (7) 一九二二年一月一日執筆。『小説月報』一四卷四号、二三年四月一日掲載。『冰心文集』3所収。
- (8) 一九二二年一月二日執筆。『晨报副鐫』二二年一月二六日、および『小説月報』一四卷一号、二三年一月一日掲載。『冰心文集』3所収。
- (9) 小説、散文集。文学週報社、一九三〇年一月出版。
- (10) 原注に、二篇とも、とあるように、一集と二集がある。
- 『往事』は、『小説月報』一三卷一〇号、二二年一月一日に、「生命歴史中的幾頁凶画」を副題にして、序詩とともに二十則の散文が発表された。
- 『往事』(二)は、『小説月報』一五卷七号、二四年七月一日に、序詩とともに十則の散文が発表された。

今、どちらも、『冰心文集』3に収める。

(11) 『山中雜記—遙寄小朋友』一九二四年六月二三日付の前書がある。
『晨报副鐫』二四年八月八日—一〇日連載。『小説月報』一五卷一〇号、二四年一〇月一〇日に転載。

(12) 散文集。北新書局。私が目にしたのは、京都大学人文科学研究所蔵の、二七年五月初版、三七年二月三四版である。この本の出版については、晨报掲載中から評判が高く、人気があったので、冰心が帰国する前の、一九二六年五月に出版されたという話がある。確かによく売れて、二七年三月二〇日には、冰心は、『第四版』自序』を書いていくくらいである。通信二八は、上海に帰りついた二六年七月三〇日に、通信二九は、冰心が北京に帰った後の八月三一日に書かれているので、現行のように、通信二九と山中雜記が入る体裁になったのは、第四版からのことかもしれない。今、『冰心文集』3で見られるが、その「第三卷説明」でも、『寄小説者』、初版於一九二六年、とある。注(75)参照。

(13) 『小説月報』に掲載された冰心の作品についての評論を左に列挙する。

- ・一二卷一—一号、一九二一年一月一〇日
- 1 潘垂統「對於超人命鳥低能兒的批評」
- ・一三卷八号、二二年八月一〇日
- 2 佩衡(閔佛九)「評冰心女士底三篇小説」
- 3 直民(沈沢民)「讀冰心底作品誌感」
- 4 張友仁「讀了冰心女士的『離家的一年』以後」
- ・一三卷九号、二二年九月一〇日
- 5 劍三(王統照)「論冰心的超人与瘋人筆記」
- 6 斯厓「評冰心女士的遺書」
- ・一三卷一—一号、二二年一月一〇日
- 7 赤子(張崧年)「讀冰心女士作品底感想」
- 8 式岑「讀『最後的使者』後之推測」

9 敦易(嚴敦易)「對於寂寞的觀察」

右のうち、5と6以外は、李希同編『冰心論』北新書局、一九三二年七月初版に収められている。

(14) この評論は、『小説月報』の二二卷(一九二二年)に発表された三篇の小説、冰心「超人」(四号)、許地山「命鳥」(二号)、葉紹鈞「低能兒」(二号)についての批評である。冰心の部分だけを抜き出して、「對於超人的批評」として、李希同編『冰心論』に収める。

潘垂統は、文学研究会会員。浙江余姚の人。ほかに小説を三編ほど『小説月報』誌に発表しているが、詳しいことはわからない。

(15) 『小説月報』は二二卷一—一(一九二二年一月一〇日)から、茅盾(一八九六—一九八二)が主編となって誌面を新たにした。この間の経緯は、茅盾「革新」『小説月報』の前後—回憶録(三)—『新文学史料』第三輯、一九七九年五月に詳しい。また、山田敬三『小説月報』の「革新」と「半革新」—『文学研究会』結成の経過—『古田教授退官記念中国文学語学論集』東方書店、八五年七月がある。

(16) 題目を課して原稿を懸賞募集することは、改組前の『小説月報』ではよく行われていた。時には、題目以外に絵を二、三出して、それをプロットとして使うよう指定することもあった。

一二卷九号に載った「本刊第一次徵文当選者」によれば、山東の王思玷と北京の高歌が「風雨之下」という小説で(甲、十五元)になり、北京の孫夢雷が「風雨之下」、蕭山(浙江省)の潘垂統がこの評論で(乙、十元)を得ている。(丙、五元)(丁、商務印書館圖書券)の名簿を見ても、他はすべて「風雨之下」の課題当選で、評論としては、この潘の文章があるだけである。

(17) 冰心の短編小説「超人」の中のことば。

(18) 短編小説。『小説月報』二二卷四号、一九二二年四月一〇日に掲載。『冰心文集』1、上海文艺出版社、八二年一月所収。「超人」については、第二章第三節第二項で触れる。

(19) 『小説月報』一三卷五号、一九二二年五月一〇日の「通信」欄では、

徐繩祖が手紙を書いて次のように言う。失望していた私は、潘垂統の評論のうち「超人」について、「著者の苦心はすべて、一般の意気消沈している青年たちを救おうとするところにある」という文を読んで、熱情と希望を呼び起こされて、「超人」を読んでみようという気になった、と。

(20) 『読冰心底作品誌感』『小説月報』一三卷八号、一九二二年八月一日掲載。

直民は沈沢民のペンネームである。浙江省桐郷県の人。一八九九—一九三四。

(21) 『小説月報』一三卷六号、一九二二年六月一日掲載。『冰心文集』1所収。

宛因という友人が海浜で療養しながら、人生や愛や死について考えたことを手紙にして、冰心に宛てた。一六通の親友の手紙という形式よりなる短編小説。

(22) 『文学旬刊』第六号、民国一〇年六月三日、の雜譚二十三、で西諦が「血和涙の文学」の必要を訴えている。西諦とは鄭振鐸（一八九八—一九五八）のペンネーム。彼は『文学旬刊』の主編であった。この文を承けて、第八号、七月二〇日には、李開中が「文学家的責任」を書き、「中国現代文学者が当然提唱すべきものは、感情の衝動的文学で、理性の玄妙な文学ではない。血と涙の文学で、花と月の文学ではない。灰色の暗澹たるロシア文学で、貴族的な穏やかで正しい英米文学ではない、」といつている。李開中については未詳。

なお、「血と涙」の文学については、次の論文に詳しい。

1 芦田肇「鄭振鐸とタゴール文学——文学研究会結成前後における文学意識の一面——」（鄭振鐸研究ノート）（『東洋文化研究所紀要』第一〇三冊、八七年三月）

2 尾崎文昭「鄭振鐸の『血と涙の文学』提唱と費覺天の『革命的文学論——五四退潮期の文学状況（二）』（『明治大学教養論集』二二七号、八九年三月）

(23) 冰心は一九二三年九月に、アメリカのボストンの先にあるウェレスリー・カレッジ (Wellesley College) に留学した。留学後一カ月余りで病に倒れたので、創作活動は二三年で中断した形になる。ただし、留学中に『晨报副鐫』の「児童世界」欄に通信を連載し（二三年—二六年）、これは後に『寄小読者』として一冊にまとめられる（二六年）。

冰心の文学性は、この「寄小読者」にこそ表われており、立派な創作活動と思われるが、それは拙文が問題にすることで、当時は、子供向きの作品としてしか評価されなかった。また、冰心は修士論文の準備や帰国後も燕京大学などでの授業、論文「元代的戯曲」『燕京学报』第一期（民国一六年六月）および呉文藻（一九〇一—八五）との結婚などで、二五年から二九年まで、作品らしい作品を書いていない。冰心本人も『冰心全集』自序で、「二六年帰国してから二九年まで、まったく一字も書かなかつた云々」と言っている。もともと、事実としては、本人もすぐ続いて言っているように、詩、散文などないわけではないが、やはりめぼしい作品といえるものはないのである。

(24) 第二章第三節第二項で触れる。

(25) 第一章第三節および第三章第二節で触れる。

(26) 第三章第一節第三項で触れる。

(27) ここには、いわゆる文学研究会と創造社との考え方の違いが濃厚に表われていると思われるが、今は述べない。

(28) この時期の雰囲気については丸尾常喜「孔乙己」についての覚え書「伊藤漱平教授退官記念中国学論集」汲古書院、一九八六年三月が詳しく、大いに教えられた。

(29) 一九一八年冬に書かれたという。一九年三月二六日付の付記がある。

『新青年』六卷四号、一九年四月に発表された。

(30) 一九一九年四月執筆。『新青年』六卷五号、一九年五月に掲載。五号は九月頃発売された。

(31) 『晨报副鐫』一九二二年二月四日から二二年二月二日まで、週一回あるいは隔週に一回、巴人という署名で連載された。第一回は

「開心話」欄に、第二回めからは「小説」欄に掲載。

(32) 魯迅「阿Q正伝的成因」「華蓋集統編的統編」所収、によれば、涵廬(高一涵)が「現代評論」四卷八九期に、多くの人が次は自分が罵られるのではないかと恐れていたと書いていることを引用している。

(33) 一九三三年一月に商務印書館から、冰心の最初の著作(詩集)として出版された。「繁星」からの引用は、「冰心文集」2、上海文芸出版社、八三年五月にもとづく。

なお、飯塚朗訳「繁星」伊藤書店、昭和一四(一九三九)年一二月がある。注(74)参照。なかなかの名訳であるが、たゞとどしいなかにあるみずみずしさを出すため、あえて拙訳にする。

(34) 「繁星」の最初の十首が「晨报副鐫」の民国一(一九二二)年一月一日の「新文芸」欄に載つてから、次は六日の「詩」欄の掲載であった。このときはさして反響はなかったが、一月一八日の上海「時事新報・学燈」に掲載されると評判になった。ドイツのベルリンにいた宗白華(一八九七—一九八六)が「流雲」という抒情小詩を書いたとき、「冰心女士の繁星の詩を読んで、久しく沈黙していた心弦がはじかれ、小詩数首を作ることになった。いささか共鳴を寄せるものである」と前言を書いた。一九三二年四月一八日のことである。そのほか、齊志仁(魯侗)や化魯(胡愈之)なども小詩について触れているが、特に胡愈之は、「冰心女士が『晨报副鐫』に『繁星』を発表してから、小詩が一時大変流行した」と、「文学旬刊」七三期、二三年一二日に書いている。

また、フランス象徴派の影響を受けた詩人汗之琳(一九一〇—)も、新詩に興味を持つようになったのは、小学校卒業時に買った冰心の詩集『繁星』以来だという。

なお、この間の様子は、卓如「冰心伝」上海文芸出版社、九〇年三月の「一六、閃爍的繁星」に詳しい。

(35) 一九二二年九月一日の「繁星」自序によれば、「繁星」という小詩は冰心の三人の弟の勧めによって、冰心が普段考えていた「零碎な

冰心と『大海』

思想」を、タゴールの「迷途之鳥」にならつてまとめたのだという。

(36) 主な出版は、次のようなものである

1 一九七九年三月 『冰心選集』 北京人民文学出版社

2 一九八二年一月 『記事珠—生活和創作經驗談』新文学史料叢書 北京人民文学出版社

3 一九八二年一月 卓如編『冰心文集』1 上海文芸出版社

4 一九八三年三月 『冰心散文選』 北京人民文学出版社

5 一九八三年三月 卓如編選『冰心選集』1 成都四川人民出版社

6 一九八三年五月 『冰心文集』2 上海文芸出版社

7 一九八三年一〇月 卓如編『冰心』中国現代作家選集叢書 三聯書店香港分店、人民文学出版社聯合編集出版

8 一九八四年八月 『冰心選集』2 四川人民出版社

9 一九八四年八月 『冰心選集』3 四川人民出版社

10 一九八四年一〇月 『冰心文集』3 上海文芸出版社

11 一九八六年八月 『冰心文集』4 上海文芸出版社

12 一九八六年九月 劉家鳴編『冰心代表作』中国現当代著名作家文庫 鄭州黄河文芸出版社

13 一九八六年一月 卓如選編『冰心著訳選集』上中下 福州海峡文芸出版社

14 一九九〇年二月 『冰心文集』5 上海文芸出版社

上海文芸出版社の「冰心文集」は、当初五冊の予定であったが、八

三年以後の作品を集めて第六巻を出すという。

(37) 単行本になっているのは、次の三冊である。

1 范伯群、曾華鵬『冰心評伝』一九八三年四月北京人民文学出版社

2 蕭鳳『冰心伝』一九八七年九月北京十月文芸出版社

3 卓如『冰心伝』一九九〇年三月上海文芸出版社

霧困気を知るために、ごく一部を挙げてみる。

(38)

霧困気を知るために、ごく一部を挙げてみる。

霧困気を知るために、ごく一部を挙げてみる。

霧困気を知るために、ごく一部を挙げてみる。

- ・『巴金選集』上下 人民文学出版社 八〇年三月
 - ・『王統照文集』 山東人民出版社 八〇年二月より
 - ・『巴金選集』 四川人民出版社 八二年七月より
 - ・『許地山選集』上下 人民文学出版社 八二年七月 (五八年二月のもの、重慶出版社が重印した)
 - ・『張天翼文集』 上海文艺出版社 八五年二月より
 - ・『巴金全集』 人民文学出版社 八六年一月より
 - ・『葉聖陶集』 江蘇教育出版社 八七年六月より
- このほか、茅盾、鄭振鐸、郁達夫、沈從文、丁玲などがあるが省略した。

(39) 冰心の伝記的資料については、本人の回想文が多くある。また注(37)に挙げた三冊の伝記も、范伯群、曾華鵬のは燕京大学にかんする資料に、蕭鳳のは幼児期の体験とりわけ海のイメージに、卓如のはアメリカ留学のことに特色があり、大変便利である。種々参考にさせてもらったが、いちいち断らない。

(40) 一九九〇年九月二〇日『光明日報』には、「首都各界聚会祝賀冰心誕辰九十周年」という記事が載っている。報道によれば、九月一八日に「学習傑出女性冰心座談会」が、民主党派の一つである中国民主促進会の中央婦人委員会の主催で行われた。

また九〇年一〇月六日『光明日報』には、国慶節に百余名の文芸家が出席した記事の付記として中国文連の代表が冰心の家に行き、九十歳の誕生日を祝ったとある。表題は、「中国文聯邀請百余名文芸家出席國慶茶話會——曹禺作書面發言。文聯代表祝賀冰心九十寿辰」である。

また『文芸報』第四〇期、九〇年一〇月一三日では、「各界人士祝賀冰心寿辰」の記事が載っている。また、一月初めに福州で、冰心創作學術討論會が四十人ほどの研究者や作家などを集めて初めて開かれたことを、舒乙が報告している(『文芸報』第四九期、九〇年一月一五日、舒乙「具有開創性的冰心現象——記冰心文学創作七十年學術討論會」)。

ついでながら、冰心の扱いは、八九年にくらべてずっと地味になった。

(41) 冰心への言及注目のピークは、一九八九年年初の、魏京生釈放要求文書に署名したという情報より始まる。署名を後で撤回したという情報もある。また同年五月一七日付の学生の要求支持を表明することになる文書「緊急呼吁」にも署名した。

(42) 冰心を児童文学者とみなす見方は、解放後特に強まった。自分でも解放後は、児童文学者を自認していた。五三年には中編児童物語『陶奇的暑期日記』を書いている。

また、「冰心児童圖書賞」などという冰心の名を冠した児童圖書への賞もあり、九〇年一〇月には第一回の表彰式が行われた。

(43) 私が個人的に接した範囲であるが、多くの人が同じ感想を持っている。とりわけ中国の人はそういう感想を私にもらした。

(44) 丁易『中国現代文学史略』一九五五年七月 北京作家出版社
表紙罪にある「内容説明」によれば、丁易は五四年モスクワで病死したので、この本は未定稿であるという。

(45) 一九一九年一〇月七日—一日、『晨报』文芸欄に連載された。この短編小説については、第二章第二節第一項で触れる。

(46) 丁易『中国現代文学史略』二四八頁。

(47) 劉授松『中国新文学史初稿』上下 一九五六年四月 北京作家出版社

(48) 王瑤『中国新文学史稿』上 開明書店 一九五一年九月。下 上海新文艺出版社 五三年八月。

日本語訳は、実藤恵秀、千田九一、中島晋、佐野龍馬共訳『現代中国文学講義』全五冊、河出書房、五五年七月より五六年四月。

(49) 引用文中の円括弧は、王瑤の原注である(以下同じ)。

(50) 一九五〇年五月一日発行。

丁玲の「五四」雑談」は、題はそのままにして、岡崎俊夫訳『文学と生活』青銅選集9 青銅社五二年七月に入っている。この本は、

丁玲の「跨到新的時代來」二九篇より講演評論など一四篇を選んで訳出したものである。

(51) 王瑤『中国新文学史稿』上 九一―九二頁。

(52) 茅盾「冰心論」『文学』三卷二期、一九三四年八月。今、茅盾等『作家論』文学社叢書、民国二五(一九三六)年四月、文学出版社所収のものに従う。八四年上海書局再印。

(53) 第二期と第三期の間に少し時間的隔たりがある理由については、注(23)を参照されたい。

(54) この点については、村田裕子氏より、以下に述べる『中国文学』月報の指摘と有益なコメントを得た。記して感謝する。

(55) 昭和一二(一九三七)年七月一日発行。なお、陣ノ内氏は御健在でいらっしゃるが、本文中では敬称は省略した。

(56) 陣ノ内宜男「冰心素描」『中国文学』月報二八号、昭和二二年七月一日。

(57) 一九一九年一月二日―二六日『晨报』文艺欄に連載された短編小説。冰心の第四作。

(58) 同注(56)

(59) 同注(56)

(60) 付記全文を引用する。

冰心は、今年の始め頃、渡米の途中、日本に一寸立寄ったことがある。その折日華学会の歓迎会に出席した。其の日の冰心の印象記を神近市子氏が、東朝に二三日連載されたことがあったが、心の紹介が日本に於て殆どなされてゐないことを歎いて居られた。創作活動を既に終ったかの感ある冰心の紹介は少しく遅播きの感はあるが、中国一流の閩秀作家として今日なほ令名高い彼女であつてみれば、冰心の代表作は、「むらさき」「令女界」「新女苑」等の一聯の女性文芸誌には訳載されて然るべきと思ふ。敢て冰心の素描を試みた所以である。(昭和二二年六月)

以上が「付記」の全文である。

冰心と『大海』

神近市子の文章は、昭和二一年九月二三日、一五日、一六日の三日間にわたつて(一四日(月)は文芸欄は休み)、『東京日日新聞』に、「冰心女士の印象」と題して連載された。神近は、その一で次のように書いている。

冰心女士の名は、丁玲女士や謝冰瑩女士の名と一緒に、私の歌には入つてゐたが、あとの二人を「水」とか「女学生」の従軍日記とかいや作品によつて記憶してゐるのに、私は冰心女士のものはよんだものを一つも覚えてはゐなかつた。古い「プロレタリア文学」で読んだやうな気もするし、それよりも近い「文学評論」ではなかつたかと思つて見たり、最後に解放社でずっと以前出した「中国作家集」の中には入つてゐるに相違ないと思つてその本を探して見たが、とうとう探し出せなかつた。

神近市子の印象記は、冰心が「姉さん女房に違ひない」と、その態度や話し方から推測するなど、女性の印象記としておもしろいが、省略する。

陣ノ内氏の「付記」は、年月や新聞名まで違つていて、この神近の文章を探すだけでかなり苦労した。その一端を、私は『東方』九一年一〇月号および一二月号に書いたもので、その顛末については省略する。昭和二一年に、冰心が日本に立ち寄つたことは、中国においては殆ど触れないことである。卓如「冰心伝」だけが、わたしたちはこの度出国遊学したに際し、先ず日本の東京に行き、烏(鳥)居龍藏に会いました。かれは燕京大学で講学することを承諾して下さつたのです。それからまた一緒に横浜に行き、学術会議に参加してきました。アメリカへは、主としてハーバード大学の三百年祝賀行事に参加するためにまいりました(四三三頁)と、駐米大使施肇基との会話で触れるだけである。

『都新聞』昭和二一年八月三二日、「文壇そのとき」と「欄」に、「中華女流の来朝」という記事がある。全文を引用する。

◆中華女流文壇で丁玲女史と並び称されてゐる冰心女士が渡米の

途次わが国にたちよつた、二七日朝夫君の燕京大学考古学教授呉文藻博士とともに横浜に着いた彼女は、午後二時には帝都神田の日華学館に姿を現し、神近市子、新居格その他中華関係の思想家などに迎へられてゐた◆夫君が起つて一席社交的なエンゼツを使ったあとを受けて彼女詩人らしい率直さで、在支邦人にチクリと曰く「中華で見た日本人と日本で接した日本人とは、大部印象が違ひます、考へてみれば、中華にきてゐる日本人はみんなお使用の方、使用人ばかりで、本当の日本人の姿はこちらへきて始めてわかつたわけです」尚彼女はエムプレス・オブ・ジャパンで、即日離日したがアメリカでコロンビア大学祭に列席した上、歐洲各地を巡遊する予定である。

以上が記事であり、私の知るどころ、最も早く最も詳しい紹介である。なお、陣ノ内宜男、猪俣庄八、飯塚朗などの中国文学研究会のメンバーや、とりわけ倉石武四郎の努力によつて、冰心の作品は、かなりのものが日本語に訳されており、この昭和一年以後、続々と発表され始めることになる。拙文も、その先輩諸氏の訳文や論述に多くのことを教えられた。

(61) これは大きなテーマで、本来別に論じなければならない。今ここでは、ごく一端に触れるにとどめる。

(62) 神近市子「社会時評」『婦人新聞』一九二四号、昭和二年四月二五日。

(63) 同注(62)。この部分をそっくり、左に引用する。

改造社の山本実彦氏が、支那に遊び、魯迅寡婦人を尋ねた折のことを書いたものが何かに出てゐた。魯迅の一子で八年何ヶ月かになる子供が客の間に交じつて、悲憤慷慨して廿五ヶ年計画で日本をやつつける計画を客達に発表したさうである。

以上が相当部分の全文である。

山本実彦の文は、「茅盾・海嬰その他」『三田新聞』三六八号（昭和二年三月三一日）というもので、そこには次のように書かれている。

その席全体に流れる空気がとても和やかであつた。それは景宋女士がなかなか客扱ひが上手であつたからであらう。この人のお客さんに接する様子を見てゐると、ちつともせまらないで応揚で、さすがに名家の出だと思はせるところが多かつた。彼の女は許崇智の姪でさうして許崇智の弟も広東(で)教育庁長をしてをつた。崇智は国民党の元老で我国人からはあまり歓迎されてはをらぬ。

景宋女士も北京の師範大学にあるとき五四運動のリーダーとなつて非常に気炎をはいた経歴の持主である。彼女は吾々にたいして应酬自在で和やかな笑(ひ)を見せてをるが、しかし内実は苦しい悶えが深刻に育まれてをることだらう。その証拠に彼の一人っ子海嬰は皆と一しよに飯をくひつつ露骨に無邪気に日本にたいする憎悪の言葉をばはくのであつた。この海嬰は八歳になつて今日でまだ三日にしかならないのだ。それなのに僕は二十五年計画を立てた。二十五年で日本をば完全に××××して見せる。さうしてその二十五年計画を一年一年にきざんで焼夷弾完成の日が何年飛行機完成の日は何年とかういふ風に軍事科学の段階を一々語つてきかせるのであつた。そのたび毎に内山君も胡愈之も胡風もハハ……高笑ひをしてこの子供の無邪気の顔を見つめるのであつた。然しながら彼の母の顔は笑つてゐる中にもいささかの陰翳が宿されてをるのであつた。父の魯迅先生の外国の友だちの前で日本征伐の話は無遠慮にやらかすので……しかしそれでも彼女はやめさせようともしなかつた。制止して却て藪蛇に終るのを知つて居つたのであらう

右の引用文中、() は私が補つた字。横の() は判読に自信がない字である。漢字は現行通用のものに変えたが、かなづかいや句読点はそのままだした。魯迅研究者にはよく知られた事柄かもしれないが、神近市子、山本実彦の証言は、日中関係を考える上でも貴重なものとなると思うので、冰心からは少し離れるが敢えて長々と引用した。

(64) 張赫宙「中国女性の抗日」文学者の対支関心 I 『報知新聞』一二

年一月一九日

張赫宙(チャン・ヒョクチュ)、小説家。一九五二年日本へ帰化。日

本名野口赫宙(一九〇五—)

(65) 「文学者の対支関心」は、『報知新聞』昭和十二年一月一九日から一人三回づつ受けもって、九回にわたって連載された。

1 張赫宙「中国女性の抗日」

一九日

2 張赫宙「中国人の思想混乱」

二〇日

3 張赫宙「国防文学の正体」

二二日

4 中野重治「二つに分れた支那」

二二日

5 中野重治「日支文学の聯繫」

二三日

6 中野重治「死せる魯迅を懐ふ」

二四日

7 佐藤春夫「感傷的な感懐」

二五日

8 佐藤春夫「中国の社会的観念」

二六日

9 佐藤春夫「相互の先入偏見」

二七日

(66) 中野重治「二つに分かれた支那」文学者の対支関心4 『報知新聞』昭和十二年一月二二日。

(67) ちなみに、『改造』昭和十二年六月号には、「中国共産党領袖毛沢東

会見記」があり、エドガー・スノー「中国共産党の対日政策」と、アグネス・スメドレー「西安事変と国共合作」が掲載されている。また、『日本評論』昭和十二年七月号には、エドガー・スノー「支那ソヴェト地区訪問記」が掲載されている。

(68) 張赫宙「国防文学の正体」文学者の対支関心3、『報知新聞』昭和

十二年一月二二日。なお、昭和十二年三月四日、永松定とともに一ヶ月の予定で上海へ赴いた小田嶽夫は、その報告を「最近支那芸術界の報告」『日本評論』五月号、「上海通信」『文芸』五月号に発表している。「最近支那芸術界の報告」では、鹿地亘の家で胡風に会ったので、「国防文学」論戦はどうなったかとたづねたら、「いや、もう終わりました、何もありません」と答えられたということを伝えている。

(69) 詳細に新聞、雑誌を見れば、予想外に中国の作家や作品が掲載され

ているともいえる。ただし、主流は中国政治への関心であった。昭和十二年に限って言えば、後半からまた文化面の文章、記事が多くなるが、『文芸』一二月号の付録として、中国文学研究会編『支那文学事典』があることを特記しておこう。

(70) 猪俣庄八「超人」解説、『中国文学』月報三八号 昭和十三年五月一日

(71) 賀玉波「歌頌母愛的冰心女士」、李希同編『冰心論』北新書局一九三三年七月、所収

(72) 飯塚朗「冰心の脆弱性」『中国文学』月報四九号、昭和十四年四月一日

(73) 同注(72)。

(74) 飯塚朗は、昭和十四年二月、伊藤書店より冰心の詩集『繁星』の全訳を出版した。白鳥省吾が「序」を書き、解説となる「謝冰心について」を自から北京で書いている。その初めの部分を引用する。

謝冰心は、支那の現代文壇に、女らしい美態とヒューマニティを、花火の様に打上げて消えた女流作家である。(略)

支那の現代文学は、日支事変を契機として、一頓挫を来した。而かして巷間の書店から、新文学の書籍が多く姿を消した現在でも、冰心の作品は依然として一部の読者を把握してある。かうした生命を持ち続けてゐる事実に対しての可否は、此処では論じない。

冰心が社会に対して盲目であったとか、安穩な家庭の中で、文学に敗北してしまつたとか、さういふ問題は別として、只支那で一番女らしい作家、自然を愛し、母を愛し、子供を愛した冰心の文学は、隣邦の女心を知るためにも、もっと早く、日本の家庭読物としてでも、紹介されてよかつたものと思はれる。

飯塚は、「北京の乾燥した空気の中で」、「めまぐるしい興亜の転変を身辺に感じながら」、「隣邦支那が生んだ最も女らしい作家」、冰心を訳したのである。なお、飯塚は「魯迅から趙樹理」翻訳文学史の側面『呻啞』五号、昭和五〇年一二月の七四―七五頁に、謝冰心の自

訳六種を挙げてゐる。猪俣庄八「超人」や実藤惠秀「写真」への言及がないのは残念である。

続いて、昭和一五年には東成社より『支那文学全集』が出版され、その「女流作家集」には、奥野信太郎訳「最初の晩餐会」、猪俣庄八訳「二つの家庭」、「山中雜記」が収められているというが、未見である。

また、同じ昭和一五年の『新女苑』誌には、次のように四月号から一二月号まで毎号に氷心の翻訳が載った。

1 四月特別号、実藤惠秀訳、松野一夫画「写真」(名作絵物語)

2 五月号より一二月号まで、倉石武四郎訳、森田元子画「乙女の旅より子供の国へ」(全八回)

なお、六月号には倉石による「訳者のことば」があり、「謝氷心という名は近ごろ我が国でも大分知られてまゐりましたが……」と紹介されている。

次の注(75)を参照。

- (75) 一九二六年五月、北新書局より出版。注(12)及び(23)を参照。『晨报副鐫』の「児童世界」欄に掲載することを意図した通信二九篇と「山中雜記」一〇則を集めたもの。二三年から四年間にわたって書かれたが、それはちょうど氷心のアメリカ留学および病氣療養と重なっている。清純な心情が美しい文章によって表現され、多くの読者を獲得した。この作品以来、氷心は児童文学作者としてみなされるようになった。倉石武四郎訳「おとめの旅より子どもの国のみなさまへ」三省堂、昭和一七年があるというが、未見。前注(74)の『新女苑』連載のものをまとめて一冊にしたものと思える。また、倉石武四郎訳、昭和一五年一月付の「前書き」のあるガリ版刷冊子「乙女の旅より子供の国へ」京都恒星社がある。通信一、二、八、一〇、の四篇のみの訳である。

- (76) 陣ノ内宜男「氷心素描」『中国文学』月報二八号、昭和一二年七月一日

- (77) 『晋陽学刊』一九八二年第六期の「呉文藻自伝」五〇頁によれば、朱世明將軍を团长とする中国駐日代表団の政治組組長、兼同盟国対日委員会中国代表顧問という資格である。

朱世明(一九〇二—七二)は湖南の人、字塵亮。清華学堂(大学)で呉文藻と同期であった。のち、アメリカ、マサセッツ州立理工学院およびヴァージニア軍校に留学。四六年に駐日軍事代表団团长。四七年には駐米中国軍事使節団团长。七一年東京で死去。

なお、「中国当代社会科学家」第八輯、書目文献出版社、八六年一月の「呉文藻自伝」もほぼ同じであるが、微細な差異がある。たとえば、朱世明も將軍とはなっていない(九二頁)等。

- (78) たとえば、昭和二六年六月二〇日に、東京大学の学生たちに聞一多の最期を話したときは、きついまなざしで興奮して語ったと、倉石武四郎が河出書房市民文庫『お冬さん』昭和二六年一月の「解説」で紹介している。

- (79) 氷心は一九五一年に秘密裡に日本を脱出し香港から中国大陸に入った。氷心の訪日は、

1 一九五五年八月 第一回原水爆禁止世界大会に出席のため来日、

一八日間

2 一九六一年三月—四月 第二次アジア・アフリカ作家会議常務委

員会緊急会議

3 一九六三年一〇月—十一月 中国作家代表团(巴金团长)

4 一九七三年四月—五月 中日友好協会訪日代表团(廖承志团长)

5 一九八〇年四月 中国作家代表团(巴金团长)

以上の五回である。時期等につき、日中文化交流協会の佐藤純子氏に確認して頂いた。記して感謝する。

また、六三年一月に東京の倉石武四郎主催の中国語講習会で「私の歩んだ道」と題して講演をした。このテープをおこした「私の歩んだ道」が『啞』創刊号、昭和四八年一月二七日に掲載されている。テープよりおこして、訳をつけたのは西川和男氏である。

また、八〇年四月二日に京都で講演をした。このテープを北岡正子氏より借用したが、この講演自体は「我和小読者」（劉平訳）として、『冰心文集』5、上海文艺出版社、九〇年二月に収められている。いちいち挙げないが、その殆どは『冰心文集』5、上海文艺出版社、一九九〇年二月に収められている。

(81) 『冰心小説散文集』人民文学出版社、一九五四年九月

(82) 『自序』『冰心小説散文集』人民文学出版社、一九五四年九月

(83) 『冰心選集』人民文学出版社、一九七九年三月。次のところ、()の部分が削除されたが、他はそのまま使用している。

這過程像一層一層的台階()、通向社会主义现实主義的大門。

(84) 唐弢主編『中国現代文学史』一 人民文学出版社、一九七九年六月一七八頁。

(85) 同注(84) 一七八頁。

(86) 盧啓元「冰心和她的創作」『冰心作品欣賞』広西人民出版社、一九八二年八月、六頁

(87) 劉家鳴「前言」『冰心代表作』中国現当代著名作家文庫、黄河出版社、一九八六年九月、一一頁。

(88) 李沢厚「二十世紀文芸一瞥」『黄河』一九八七年四期、一〇月二五日。『中国現代思想史論』東方出版社、一九八七年六月に所収。

(89) 「春水」一九二三年三月二日—六月三〇日『晨报副鐫』に掲載された小詩一八二首。のち『春水』新潮社一九二三年五月に収められた。引用文中の円括弧は李沢厚の原注である(以下同じ)。

なお、李沢厚の引用がどのテキストによるかわからないが、今、『冰心文集』2、上海文艺出版社、一九八三年五月にもとづいて訳す。微小な差異がある。

(90) 円括弧は、李沢厚の原注であるが、次の注同様に通信の番号が間違っていると思われるので、『冰心文集』3 上海出版社、一九八四年一〇月にもとづいて訂正する。

(91) 李沢厚「二十世紀中国文芸一瞥」『中国現代思想史稿』東方書店、

一九八七年六月、一三二〇—一三二二頁。

(92) 『中国作家』一九九一年一期には、「關於男人(之十) 十一、悼金近」が掲載されている。これは九〇年一〇月三日に書かれた。

第二章

(1) 『冰心全集』自序—我的文学生活』『冰心著訳選集』上冊、海峡文芸出版社、一九八六年一月、二四八頁。

この『冰心全集』自序』は、すでに第一章第二節で、王瑤、茅盾などが引用しているように、冰心の経歴、創作経験などを知るときの基本的資料である。以下、いちいち明記しない。『全集』自序、と略記する。

なお、この文章は一九三三年清明節に、香山双清別墅で書かれている。未確認であるが、『冰心小説集』冰心全集之一、北新書局、一九三三年一月に発表されたと思われる。一九四三年の開明書店による『冰心著作集』では、その一、二、三である小説集、散文集、詩集のどれにも「自序」として再録されている。一九三三年六月、天馬書店発行の、魯迅等著『創作的經驗』(今、上海書局、一九八二年四月復印、中国現代文学史参考資料)には、冰心女士「小説集自序」が入っているが、これは『全集』自序』の最初の二頁分ほどが削除されている。

(2) なお、「冰心」ということは王昌齡の詩「芙蓉樓送辛漸」の「寒雨江に連なり夜呉に入る 平明客を送りて楚山孤なり 洛陽の親友もしあい問はば 一片の冰心玉壺に在り」にもとづくこと、いうまでもない。従って、性質が淡泊で功名心がないことを感じさせる名である。(2) 当時中国に来て講演していた杜威(デューイ)を指しているものと思われる。

なお、静観は「読晨报小説第一集」『文学旬刊』第二号(民国一〇年五月二〇日)で、小説の最初で李博士の話などを書いてしまうと、小説の内容がわかってしまうから、これは余計なことだといっている。

(3) 冰心の『問題小説』については、誰でも触れるのだが、錢理群、呉福輝、温儒敏、王超冰『中国現代文学三十年』上海文艺出版社、一九八七年三月、の論及がすぐれている。それによれば、『問題小説』は新文学思潮の産物である。これは『題材ブーム』であって、『五四』後二、三年間の当時の新小説の作者の作品はみな大なり小なり『問題小説』といえる。一九年前半の『新潮』の作家からその萌生えがあり、冰心が代表である。文学研究会が、文学は『人生にかんする一般の問題を表現し討論するのだ』と公けに提唱してから、『問題小説』創作の高まりがきた。王統照、盧隱、許地山などがそうである、という。七九—八〇頁。

(4) 藤田正典編『現代中国人物別称総覧』（汲古書院、一九八六年三月）によれば、鄒韜奮のことになる。晨曦のこれらの作品は、『韜奮文集』1—3（生活読書新知三聯書店、一九五五年一〇月—五六年一月）には収められていない。『韜奮年表』『韜奮文集』1、および彼自身の『二十年来的経歴』『韜奮文集』3、また、穆欣編著田島淳訳『中国に革命を—先駆的言論人鄒韜奮』サイマル出版、八六年二月、によると、彼は一九二三年頃から投稿を始めている。『申報』『学生雑誌』などの上海の新聞雑誌にである。一九年九月には、セントジョーンズ（聖約翰）大学三年に編入学しているが、それまでの南洋公学大学部電気科では苦勞した。『優行生』になって授業料免除を得るため、苦手の数学などを必死で勉強する一方、家庭教師をしたり、『申報』などに谷僧のペンネームで投稿するなどして経済問題をやりくりしたのである。したがって北京の『晨报』に小説を投稿する余裕はなかったと考えられるので、私はこの晨曦は鄒韜奮のペンネームではないと考える。しかし、セントジョーンズ大学編入から卒業後、英文秘書になった時期のことは曖昧な部分が多いので、断言はできない。以上、狭間直樹氏の教示による。なお、『晨报』の二〇年頃に、心理学のことを書いている南晨曦が同一人物である。また、朱玉梁編『二十世紀中国作家筆名録』増訂版、漢学研究中心編印、中華七八年六月、によ

ば、江陳詩またの名は梅溪斐のペンネームとするが、この人物についても不明である。

(5) 蒲伯英のペンネーム。辻田正雄氏の教示によれば、一八七五—一九三四。劇作家で、人芸戯劇専門学校の主任となったことがある。当時小説も書いていた。

(6) 『文学旬刊』第二号、民国一〇年五月二〇日、静観『読晨报小説第一集』によれば、『晨报』に掲載した短編小説二六編を集めて出版したそうである。作者は九人。そのうち止水、大悲、冰心女士、晨曦の四人の作品が多いという。「大悲」とは、陳大悲（一八八七—一九四四）のことで、劇作家である。民衆戯劇社を組織し、『戯劇雜誌』月刊を出版した。「静観」とは李叔同（一八八〇—一九四二）。天津に生れる。劇作家であるが文化面に広く活躍。のち出家した。のペンネームであるが、この文章が李叔同のものか不安が残る。『小説月報』に投書している、広州の陳静観という人物かもしれない。

(7) 『兩個家庭』『冰心文集』1、五頁。

(8) 第一章注(29)参照。

(9) 第一章注(30)参照。

(10) 第一章注(45)参照。

なお、倉石武四郎『お冬さん』市民文庫90 河出書房 昭和二十六年一月、には、「あわれこの身の朽ちはつる」と訳されて収録。

(11) 杜甫の「夢李白」二首のうち二首め。黒川洋一『杜甫』下 中国詩人選集一〇、岩波書店、昭和三四年三月、によれば、「いま花の都には今をときめく人人がみちあふれているというのに、ああこの人ひとりはやつれたままでいる」とある。

(12) 止水「観学生団演劇底私論」『晨报』一九二〇年一月二三日

(13) 一九六三年一月の講演テープによれば、(今、西川和男氏がおこした文により、一部書き加えた。第一章注(79)参照)、次のように発言している。

那時候啊、我是正在学生会里頭做着文書。那時候名字叫文書（黑板

に書く)。現在就不説文書。那時、我在学校的時候、做文書。文書呢、這個平常学生会啊、跟外面別的学生会啊、来往写信呢。那種事情。那麼、那時候就北京所有学校的文書、就變成一個宣傳股、懂吧、宣傳股、宣傳股（黑板に書く）、宣傳股。

西川氏は「書記」と訳している。

(14) 以上の経緯の基本資料は、『全集』自序である。第二章注(1)参照。また、当然のことながら蕭鳳「冰心伝」中国現代作家伝記叢書、北京十月文芸出版社、一九九〇年三月にも詳しい。なお、一九一五年の「二十一条」条約反対デモに、貝満中学一年生として参加し、四年生であった李徳全の演説を中央公園で聞いていること。及び、一九二〇年の夏、北方五省早魁義捐金を集めるため、燕京大学ではメーテルリンクの「青い鳥」を上演し、初演時だけで二〇〇余元を集めたが、冰心は「青い鳥」の脚本を英語から中国語に訳した。このような活動を早く指摘したのは、卓如「冰心伝略」一九八一年九月執筆、「冰心選集第三卷 詩」四川人民出版社、一九八四年八月、所収である。

(15) 劉放園、本名道鑑。一九五七年癌で北京にて死去。『晨报』の編集委員。のち、貿易業にたずさわり、解放後は文史館員となった。冰心が三年アメリカ留学する際には、一〇〇ドルの金を貸してくれたという。また三八年、冰心が香港から昆明に行く際には、付き添いを探してくるなど、冰心の面倒をよくみ、可愛がった。『白香山全集』に評点をつけたという。冰心の『全集』自序および「我的表兄們」『關於男人』人民文学出版社、一九八八年二月、に書かれているが、卓如「冰心伝」が一番詳しい。

(16) 『東方学報』第六一冊、京都大学人文科学研究所、一九八九年三月、所収。

(17) たとえば、十四院校編写組編著『中国現代文学史』雲南人民出版社、一九八一年六月によれば、次のようにいう。二九一—三〇頁。

あきらかに、穎石兄弟と父親との矛盾はすでに新旧世代間の保守と先進の矛盾ではなくて、民主勢力と封建主義や帝國主義勢力間の矛盾

の家庭における反映なのである。小説は家庭内の父と子の衝突を通じて、こういう社会矛盾を暴き出したが、これは大いに評価されるべきことである。だが闘争の結末は、民主勢力を代表する息子の世代の勝利ではなく民主勢力を代表する息子が父権の猛威のもとに、涙をのんで屈伏することである。これはあるいは、当時の社会現実だったかも知れない。しかし、それは決して歴史の本質や主流を代表できないのである。というのも、真に五四民主潮流を代表する人民革命勢力は、これまで屈伏したことはないから。それで、穎石兄弟の屈伏はただ五四運動中のブルジョア階級の軟弱さの表現にすぎない。穎石兄弟がたとえ軟弱であろうとも、彼の行為が表現した基本思想は、疑いもなく、旧制度と調和できない反逆者の思想なのである。

(18) 代表的なものとして、司馬長風『中国新文学史』上、香港昭明出版社、一九七五年一月、がある。司馬長風は次のように言う。

出世作「斯人独憔悴」についていえば、テーマは父子の衝突を書くことである。父親は北洋政府を支持する軍閥で、息子は北洋政府に反対する愛国学生である。もともと「五四運動」を背景とする写実小説なので、もしうまく取り扱ったなら、歴史に照り映える名篇を残すことができたであろうが、技巧が幼稚で見るにたえないものとなってしまっている。一一二頁。

(19) 「回憶」五四「冰心文集」5、上海文芸出版社、一九九〇年二月、五七八頁。

この頃、私は一編書き終わるごとに、必ず母に先ず読んでもらった。父もときには意見を言った。今言っておかねばならないが、私の両親はかなり思想的に開けていたので、私が学生運動に参加するのを阻止しなかった。父は、抗日救国ということには特別熱心で、ときには語句の修正を手伝ってくれた。たとえば、「斯人独憔悴」に愛国青年と頑固派の父親との会話があるが、そのいくつかのことは父が付け加えたものなのだ。私たちは書きながら笑った。というのも、そういう老人がしゃべることばは、どれも

私は聞いたことがなかったからで、私も迫真のものと思った。
この文章は、七九年三月二日に書かれている。

(20) 多くの作家が、自分の作品を父、母、祖父母あるいは隣人や子供などに先ず読み聞かせ、その反応によって文章を練り直している。たとえば趙樹理もそうであった。

(21) 「週年紀念増刊第三張」という。なお、この「紀念増刊」は、当時の思想界の主要人物を網羅していると思われるので、次に繁を厭わず列挙する。

・週年紀念増刊付録

- (伝記) 「志羅素」 張崧年 第七版
 - (小説) 「八個字的病」 晨曦
 - 「私買的兒子」 如愚
 - (雜録) 「馬克思(Karl Marx)年表」 紹虞
- 訳自日本大学評論

・週年紀念増刊第一張

- (論説) 「今後底言論界」 止水 第一頁
- 「文化運動不要忘了美育」 蔡元培
- 「這是菌的生長呢還是笋の成長呢？」 蔣夢麟
- 「為甚麼要愛國？我与国家有甚麼關係？」 潘力山 第二頁
- 「新学校」 張崧年
- 「告北京勞動界」 陳独秀 第三頁
- 「中国的經濟社会還應經過資本主義時代嗎？」 一湖
- 「言論与治安」 陶履恭 第四頁
- 「民族問題」 品今
- ・週年紀念増刊第二張
- (論説) 「報紙的現在与未来」 東蓀 第五頁
- 「青年厭世自殺問題」 李大釗
- 「批評的研究——三W主義」 羅家倫

- 「一個社交問題——八分鐘的閑譚」 康白情 第六頁
- 「我對於研究農学底意見」 象予
- (伝記) 「俄国革命之祖母 Catherine Breshkowsky」 吳弱男女士 第七頁

・週年紀念増刊第三張

- (文芸) 「週歲——祝晨報一年紀念」 胡適 第九頁
- 「晨報……学生……勞動者」 冰心女士
- 「一件小事」 魯迅
- 「聖処女の花園——俄人庫普林作」 起明訳
- (筆記) 「膠濟沿路一警記」 淵泉
- (記載) 「山東問題過去及将来」 勉巳 第十頁
- 「週年的平和夢」 方文 第十二頁
- (雜録) 「去年今日」 皓
- 「一年」 皓

(22) 周作人のペンネーム。

(23) アレクサンドル・イワノヴィチ・クプリーン(一八七〇—一九三八)。ロシアの作家。周作人は、この訳の後に付記をつけ、クプリーンが退役軍人であること、この作品が第一次世界大戦開始後の一九一五年に書かれたこと、「皇帝之公園」を「新青年」四巻四号に訳出したことなどを述べている。

(24) 世界の神聖で永遠なる母性への祝福と不朽を称える場面と、戦争がおこなわれ、キリストが受難を蒙る場面とを対比して描き、マリアが優雅な白い花びらに血の露がたまっているのを見るところである。周作人も付記で言うように、「一種特別な書き方で、まるで空想的な作品」である。第二章注(40)参照。

(25) バートランド・ラッセル(一八七二—一九七〇)。イギリスの哲学者。四行の紹介文は次のようにいう。
ラッセルは現代の最も有名な数理哲学者である。著書には次のようなものがある。「政治的理想」「社会改造の原理」「自由への道」など、

これらすべて現代の学界の最大の成果である。詳しいことは『ラッセル小伝』を見ていただきたい。

これは、注(21)で触れた張焜年「志羅素」を承けて書かれている。なお、ラッセル著牧野力訳『中国の問題』理想社、昭和四五年九月、およびその解説である新島淳良「バートランド・ラッセルと中国」が参考になる。

(26) 淵泉は、陳溥賢のペンネーム。淵泉がこれまで言われてきたように李大釗のペンネームではなく、陳溥賢であることを綿密に論証したのは、石川禎浩「李大釗のマルクス主義受容」『思想』八〇三号、一九九一年五月、である。この論文の教示によれば、陳溥賢(一八九一—一九五七)。福建閩侯の人。早稲田大学に学び、李大釗と『晨鐘報』に入る。『晨報』の特派員となって訪日、訪欧。のち晨報社社長。台湾にて死去。

この「膠済沿路一瞥記」も、一九九年日本より帰国するに当って、わざわざ青島に寄り、その五日間の見聞を書いたもの。山東問題が我が国民生死の大問題だから、匆々に書いてできが良くないが、敢えて書く、といった内容の前書がある。

(27) 冰心自身もどこかで書いていたが、この辺のことについて、范伯群、曾華鵬「五四」驚雷『震』上文壇的一顆新星——『冰心評伝』之一章『中国現代文学研究叢刊』一九八〇年第四輯(二月)、一一五頁によれば、次のようである。

当時において、周氏兄弟や胡適はみな名声嚇たる学者であり作家である。しかるに冰心という満二十歳にもならぬ少女が、名士の間名をつらねる。これは彼女にとって、この上ない名譽であったといつてよからう。

今、『冰心評伝』人民文学出版社、八三年四月、三二頁。

(28) 「作品表」にある、一月一日の「我做小説、何曾悲観呢？」は、冰心の小説には悲観の語が多いと不満を書いた旧友の手紙に対する返事である。冰心は、同じ小説に対しても、友人とは反対に、積極

的意義を感じとってくれた書評もあったと述べ、これからは樂觀的なものも書くという。この冰心の文に賛意を表したのが、一七日の白瑛の投稿である。

(29) 芥川龍之介が自殺した際に遺した²²ことば。芥川は昭和二(一九二七)年七月二四日、三七歳で自殺している。

(30) ここでは魯迅の「一件小事」を論ずるわけではないので、一言付言するにとどめる。なお、代田智明「語り手の位相——小さな出来事」と「無題」に関する、些か大袈裟なメモランダム「颯風」第二四号(一九九〇年七月)がある。

(31) 最近の中国文学史は、「五四運動」後の新文学にみられる明るさに言及している。たとえば、黄修己『中国文学発展史』中国青年出版社、一九八八年一月、などもそうである。また、樂黛雲『比較文学原理』湖南文艺出版社、八八年八月、もその第四章「西方文艺思想与中国现代文学」で、明るさについて触れている。なお、劉納『論五四』新文学』浙江文艺出版社、八七年三月、の「五四」初期新文学作品中的「董心」美』も、この明るさについて論じたすぐれた論文である。

また、注(25)で触れた、新島淳良「バートランド・ラッセルと中国」に次のようにいうところがあるので、参考までに引用する。二九〇—二九一頁。

中国の新興インテリゲンチヤは、すでに辛亥革命を経験し、その失敗、失望からひとつの共通の反省的認識ともよぶべきものに達していた。それは、真の革命のためには、単に中国人の政府をつくつたり、帝制を廃止したり、国会などの西欧の制度をとりいれたり、殖産工業にはげんだりするだけではだめであって、中国の「国民性の改造」こそまず第一に着手すべきことだ、ということであった。すなわち、一人一人の中国人の心の構造を変えねばならないのだ、という共通の認識に達していたのであった。現在の日本に生きるわれわれの目からみると、それはとほうもないことである。第一に、一国のインテリゲン

チアがひとしく時を同じくしてこのような共通の認識に達するということがふしぎであり、第二には「国民性」といった漠然としたものを、変革しようというオプティミズムという、その認識内容が奇妙である。だがインテリゲンチアが一国的規模で、このようなオプティミズムで見解を統一できたということ、そのことがとりもなおさず国家の若さなのだと思われる。精神は変えうる、というオプティミズムは明らかに個人においては青春期に特有のものであろう。五・四文化革命期に、中国の知識界が、老いも若きもこのような精神界の革命に熱中したということは中国という新興の国家が青春期にあったというしか説明のしようがない。

(32) 『小説月報』第二二巻第四号、一九二二年四月一〇日。「超人」の本文の後に、次のような「附註」がある。

雁冰がこの小説を見せてくれたが、私は思わず泣き出してしまった。何彬の手紙を読んで誰が泣かずにいられよう。もし泣かない者がいたならば、その男は「超人」ではなく、道理のわからぬ奴にすぎないのだ。

冬芬附註

ここに出てくる「雁冰」も「冬芬」も、茅盾のペンネームである。

(33) 冬芬のことばは注(32)参照。

巴金は「冰心著作集後記」一九四一年一月記、四二年二月重写で、冰心の作品から多くの温かみと慰めを得たこと、また生活の勇氣を得たことを書いている。そして、「超人」の子供が自分の母親を愛することによって、我々をして母親を愛するようにさせたと書いている。

(34) 潘垂統「對於超人命命鳥低能兒的批評」『小説月報』二二巻二二号、一九二二年一月一〇日。第一章注(13)および(14)参照。

(35) 第一章注(20)参照。

(36) 第一章注(13)参照。王統照(一八九七—一九五七)については、吉田富夫『五四の詩人王統照』京都大学人文科学研究所共同研究報告「五四運動の研究」第三函9、一九八五年一月、同朋舎、を参照され

たい。

(37) 第一章注(13)参照。徐週翔、欽鴻編『中国現代文学作者筆名録』中国現代文学史料匯編(丙種)、湖南文艺出版社、一九八八年二月、によれば、閔佛九のペンネームということになるが、未詳。

(38) 第二章注(33)参照。

(39) 葉紹鈞(一八九四—一九八八)。字聖陶。江蘇省呉県の人。中学卒業後、小学校や中学の教師となる。早くから小説を書き、新潮社に入、文学研究会の発起人ともなっている。地道な書き方で「灰色で瑣末な人生」を描き、社会の暗部や弊害を摘発している。「阿菊」(二〇年)「苦菜」(二二)「隔膜」(二二)などがこの頃の作品としてある。

(40) 前項(第一項)で触れた、起明(周作人)訳のロシア一九世紀末の作家クプリーンの「聖処女の花園」は、天上のマリアの花園という神秘的で幻想的な話であること、また無限なる慈恵という母の愛への言及があることなどから、冰心の「超人」との関連が注目される。第二章注(24)参照。

(41) 郭沫若(一八九二—一九七八)。四川省楽山県の人。処女詩集「女神」は、二二年八月、上海泰東書局から創造社叢書第一種として出版された。その反逆的精神と自己主張が青年たちの大きな共感を呼んだ。

(42) 郁達夫(一八九六—一九四五)。浙江省富陽県の人。小説集「沈淪」は、二二年一〇月、上海泰東書局から創造社叢書第三種として出版された。中国の最初の白話小説集。主人公の退廃墮落が民族的社会的弱者である祖国への抗議や反抗となるところに、青年たちの強い共感を呼んだ。

(43) 『創造季刊』一卷四期、一九三三年二月一日、成仿吾「評冰心女士的『超人』」二三年一月三〇日執筆。李希同編「冰心論」北新書局、三二年七月、所収。これは、第一章第一節第一項の、成仿吾への言及を承けている。

(44) 同注(43)

(45) 成仿吾は名指しているわけではないが、第一章注(13)に挙げた、

『小説月報』に掲載された諸評論を十分念頭に置いて論じている。(46) この点については、梁啓超より論を始め、中国近代文学における社会的意義(価値)の理念を問題にし、小説鑑賞の楽しさではなく、小説における効用面の作用が追求されたことを論じた、高田昭二『中国近代文学論争史』風間書房、平成二(一九九〇)年一月、が参考になる。なおこの本は、『岡山大学法文学部学術紀要』(二五、二九、三〇)に発表した論文等をもとにしている。

(47) 本名許贊堃(一八九七—一九四二)。筆名落華生。幼い時から福建で育ったせいもあり、福建生まれの冰心とは仲がよく、留学中は兄のように彼女の面倒をみた。冰心が『燕京学報』第一期(民国一六年六月)に発表した論文「元代的戯曲」のため、資料を貸してやっている。許地山は、冰心をめぐって呉文藻との恋の争いに敗れたと私は推測している。

(48) 本名梁治華(一九〇三—八七)。北京の人。アメリカ留学より帰国後、新月社を組織し、人性論(ヒューマニティ)を標榜して、文学の階級性を否定した。

(49) (一九〇一—八五)。江蘇省江陰県の人。清華大学卒。社会学専攻。二年コロンビア大学で博士号取得。二月帰国し、六月冰心と結婚した。四六年中国駐日代表団の政治組組長として来日。五一年秋、中国大陸へ秘密裡に帰国。五三年以降、中央民族学院の教授。五八年「右派」とされる。七九年に名誉回復。

(50) この間のことなど、伝記的におもしろいことが多いが、アメリカ留学中のことなどは資料面などでも、私の手に負えない。冰心から直接話を聞いたり、一貫して研究を続けてきた卓如の『冰心伝』上海文芸出版社、一九九〇年三月、に頼るしかない。

第三章

(1) たとえば、第一章第二節で触れた、王瑤や茅盾の冰心についての文章を参照。

(2) 李沢厚『二十世紀中国文芸一瞥』第一章注(88)―(91)、ならびに第一章第四節参照。

(3) 『寄小読者』通信二二、一九二三年二月三日付、青山沙穰。今、『冰文集』3、上海文芸出版社、一九八四年一〇月、による(以下、『寄小読者』は、通信の番号のみ明記する)一一二頁。

なお第一章注(74)、(75)で触れたように、日本語訳に倉石武四郎「乙女の旅より子供の国へ」があるが、『新女苑』昭和一五年七月号掲載のものでは、次のように訳されている、一八九頁。

小さいみなさま、貧乏人も金持も、身分の高い人も低い人も、神様はみんなにお母様を留意して、みんなが愛していただける様にしてくださるのです。

つまり、左の原文の部分が訳されていない。

又試問鴻濛初辟時、又哪裏有貧富貴賤、這些人造的制度階級？遂令當時人類在母親的愛光之下、個個自由、個個平等！

これは、倉石がよったテキストが違うことによるとは、他の部分がほとんど一致することによって、考えられない。昭和一五年という日本時代の雰囲気、倉石をして削除して訳させることになったのではないかと推測するが、確証はない。

李沢厚は、この引用文の最後の文「人類は母の愛の光のもとで、それぞれが自由で、ひとりひとりが平等」を引用していた。第一章注(91)。

(4) 『寄小読者』通信二二、倉石武四郎訳。『新女苑』昭和一五年七月、一八九頁。

(5) 『寄小読者』通信二、倉石武四郎訳。『新女苑』昭和一五年五月、一三〇頁。

(6) 同注(5)。この最後の一文は、原文は次のようである。

出到門外、只聽得它在虎兒口裏微弱凄苦的啾啾的叫了幾聲、此后便沒有了了声息。

原文は「啾啾的」とかなり具体的に擬声語まで使用している。ここ

で倉石が、チューチューといったような訳語をいれなかったのは、一つの見識であるかもしれない。しかし、それを認めた上で、私には、ここでは具体的な鳴き声まで出さないと、悲しい事件も残酷も生きてこない気がする。

(7) 『寄小読者』通信一、倉石武四郎訳。『新女苑』昭和十五年五月、一三頁。

(8) さらに言えば、抽象的な『母の愛』の高まりは、かえって具体的な愛の始まりがあつたのではないかと思う。しかし、これは現在のところ単なる推測にすぎない。

(9) 『南婦—貞献給母親在天之靈』北新書局、一九三一年八月、が出版されているというが。未見。

川副照夫訳恩地孝四郎挿画「南婦—天にいます母の靈に献ぐ」は、『婦人之友』昭和二十四年一月号—三月号、三回連載。

(10) 川副照夫訳、「南婦」『婦人之友』昭和二十四年二月号、六四—六五頁。

(11) 「児童文学工作者的任務与児童文学的特点」『冰心文集』5 上海文艺出版社、一九九〇年二月、五九八頁。これは、七九年になされた講話である。

(12) 『文学季刊』三期、一九三四年七月。今、『冰心文集』1、上海文艺出版社、一九八二年一月、による。

(13) 実藤恵秀訳、松野一夫画「写真」『新女苑』昭和十五年四月特別号、名作絵物語。

名作絵物語というシリーズのせいか、完訳ではない。完訳としては、倉石武四郎訳「写真」『お冬さん』河出書房市民文庫、昭和二十六年一月所収がある。なお、飯塚朗訳「うつしえ」が、昭和十四年一〇月、中国文学研究会編『支那現代文学叢書第一輯 春桃』、伊藤書店に収められている。飯塚訳は、のちに小田嶽夫編『現代支那文学傑作集』春陽堂書店、昭和十六年七月にも収められたそうであるが、それは未見である。なお、中国文学研究会編の本には、猪俣庄八訳の「超人」も収められている。

(14) 倉石武四郎訳。『お冬さん』二二六—二二七頁。ただし、スミス嬢(原文、施女士)ピタースン牧師(原文、畢牧師)を、実藤訳を参考にして、C女士、B牧師と変えた。倉石訳がもとずいたテキストは現行本と違うのかもしれない。飯塚訳では、C女士とP牧師になっている。

(15) 惘懐『寂寞』といったことは、冰心の作品に多いが、とりわけ一九二三年頃に多い。「往事」「往事(二)」「山中雜記」「寄小読者」といった作品に頻出する。すでに唐弢(「前言」)によれば、嚴家炎が実質的に担当していたらしい)が、幼児期を追憶するときに帯びる」と、惘懐や哀愁について触れていた。第一章注(84)参照。

(16) 川副照夫訳「南婦」、『婦人之友』昭和二十四年二月号、六一—六三頁。

(17) 黄英(錢杏邨)「謝冰心」『現代中国女作家』北新書局、一九三二年八月所収、一〇頁。この論文は、李希同編『冰心論』北新書局、一九三二年七月に再録されている。

なお、私の見た本は増田渉文庫所蔵のものである。その本は黄英編『現代中国女作家』とある、その「黄英編」の三文字を万年筆で消し、その右側に大きく「錢杏邨著」と万年筆で書き直してある本である。

(18) 同注(17)一六頁。なお、錢杏邨の論は、部分だけ引用するときわめて武断的で粗っぽい論にみえるが、全文を通して読めば説得力を持っていることをつけ加えておく。

(19) 冰心の第一出版物であり、第一詩集でもある。『晨报副鐫』一九二二年一月一日—二六日に連載された小詩一六四首を、二三年一月、商務印書館より文学研究会叢書の一つとして出版。今、『冰心文集』2、上海文艺出版社、一九八三年五月、による。第一章注(33)参照。

(20) 第一章注(89)参照。

(21) 『繁星』七五、八五、一一三がそうであり、一二八も逞しい父の姿が出てくる。第一章第一節第二項に、八五、一一三、一二八の三首は訳出している。

(22) 冰心は、自分でも海への言及を多く書き残しているが、アメリカで

病氣療養中、海浜に行くことを医者から止められ、必死に弁明し、自分にとっては海が必要だと説得して、とうとう海辺に行ったこともある。「山中雜記」七、説幾句愛海的孩氣的話、など。また、一九六二年九月に「海恋」「人民文学」九月号、を書いて、海をいろいろな角度から描き、なぜ自分が海を好むかの説明をしている。

(23) 「繁星」一九、『冰心文集』2、一〇頁。

(24) 『記事珠』人民文学出版社、一九八二年一月、所収のもののみは、次のように、『天真而』の三文字が増えている。四四頁。

你們看她小時已經是這樣的天真而沈默了——

(25) 「往事」一〇、『冰心文集』3、上海文艺出版社、一九八四年一〇月、二七頁。

(26) 茅盾は、『冰心論』『作家論』文学出版社、一九四頁で、次のようにいつている。

このような、ひとりさびしく、それでいて平静で、『詩意』に富む環境の中で、幼い彼女は、ひとり座って沈思する習慣をもっていた。彼女は『じっとひとりで石段に座って、海に對して』まるまる三時間座っていたのである。第一章注(52)参照。

(27) 賀玉波「歌頌母愛的冰心女士」、李希同編『冰心論』北新書局、一九三三年七月、所収。一七一頁。

(28) 同注(23)

(29) 同注(27)、一六八頁。

(30) 蛇足になるが一言付け加えておけば、以上のことから、冰心において『大海』は重要なキイワードなのである。したがって、茅盾がその『冰心論』の中で『全集』自序から引用した際、『大海』を落としてしまったのは重大な欠落であったといえる。これまでの評論が冰心の何かを欠落していたその象徴のような気がする。

作品表：『晨报』文芸欄掲載の冰心の作品(左側)関連記事(中段)
および冰心以外の作者の小説や翻訳小説(右側)の一覧表

民国8 (1919) 年

月	日	冰心の作品	関連記事	翻訳小説, 他作者の小説
8	25	「二十一日聽審的感想」(女学生謝婉瑩投稿)		
9	3			「銀匙」(社会小説)意大利名家達能齊欧氏原著, 瘦鵲訳
	3-9			「田家楽」晨曦
	4	「“破壊与建設時代”的女学生」(女学生謝婉瑩投稿)		「誰之罪」(社会小説)法国名家毛柏桑原著, 瘦鵲訳
	12-15			
	18-22	「兩個家庭」(冰心女士)		
	24 29-10/2			「白受了一番痛苦」宋懷玉女士 「鐘」(教育小説)晨曦
10	4			「父親」那威畢生著, 佩弦訳
	7-12	「斯人独憔悴」(冰心女士)		
	13-18			「奴隸」(家庭小説)瑞典名家史屈恩白原著, 瘦鵲訳
	19-21			「長期徒刑」托爾斯泰著, 謝麗逸訳
	22, 23			「詩礼人家底月亮」止水
	24-29 30-11/3	「秋雨秋風愁殺人」(実事小説)(冰心女士)		「長亭淚」(実事小説)晨曦
11	11	「我做小説, 何曾悲觀呢?」(散文)(冰心女士)		
		↳ 11/17「悲觀何嘗不可」(白輿投稿)		
	17			「二学生」止水
	20			「誰是主人?」(短篇小説)陳大悲
	22-26 28	「去国」(冰心女士)		↳ 12/4「讀冰心女士的“去国”的感言」(鵲魂投稿) 「殺兒子的父親」楊鐘健
12	1	[增刊付録] [增刊付録] [增刊第三張]「晨报…学生…労働者」(冰心女士)		「八個字的病」晨曦 「私買的儿子」如愚
	6, 7			「兒時之回憶」俄国托爾斯泰, 沈穎訳
	11-16			「紀念日」(教養小説)俄国札索基穆斯克著, 沈穎訳
	19			「女学校的規矩」凡
	21, 22			「貨車」(社会小説)俄国烏斯平司克著, 沈穎訳
	24-28			「馱吏」俄国普希金氏著, 沈穎訳
	30, 31			「一夜」晨曦

民国9 (1920) 年

1	5			「新年在那兒?」晨曦
	6, 7	「莊鴻的姊姊」(冰心女士)		
	8			「一副金手鐲」凡
	9			「未婚妻」Marguerite Audoux, 虞訳
	10, 11			「猶太人」俄国馬敏西比亮克著, 沈穎訳
	12, 13			「騙不識貨的人」Ernest Lumer* 著, 虞訳
	13-16	「觀学生团演劇底私論」(止水)		
	15			「已經改良的私校」森
	16-18			「刺拉比亞他」Pascal Heyse著, 虞訳
	22			「命!」水澄
	26			「兄弟三人」脱爾斯泰著, 晨曦訳
	29	「一篇小説的結局」(冰心女士)		
	30-2/4			「失望」俄国 Turgenjev, 沈穎訳

* 文字不明, 暫定的に Lumer* としておく。